聖金口イオアン原著

神品論

司祭に按手後の說教

明治
41 6 9
内務

明治四十一年

正教會編輯局

聖金口約翰著

神品論

第一說

聖金口イオアンの神品論著述の事由左の如し。ハリストス降生後三百七十四年イオアンは同歳の友アシリイと共に遠く世塵を避けて住したるに偶〻アンティオヒヤに集會したるの意あり、其風聞傳はりて二人の耳に入りたるに聖イオアンは司祭職及び主教職を以て高尚重大なりとし自らハリストス教會の牧師たゐ職を行ふに堪へざる者と爲し密かに逃れ其同居の友にすら秘して身を匿くしアシリイ獨り主教(想ふにアンティオヒヤ附近シリヤのラフアナの主教)の位に叙せられたり。然れども後幾くならずしてアシリイは聖イオアンを見て其神品職を遁避したるを忠告譴責したるにイオアン乃ち此に譯する神品論六篇を以て之に答へたり。されば本論の著述は三百七十四年後なるも聖イオアンの既に司祭に按手せられたる三百八十六年前にありと爲すべし。

誠實にして信義篤く友誼の法を知りて之を嚴守したるの友我に多く之れありしと雖も多くの中より一人我に對する友情の他の諸友に比敵すべからざる者あり、その友情の他の諸友より濃かなることなほ他の諸友の我に對して冷淡なる人々より濃かなるごとし。彼は常に我と相離れざるの同伴者なりき即ち我等は同一の學を修め教師も同一にして同等の嗜好と熱心とを以て能辨學を修め同一の修業より出づる同一の希望を懷きたり。且曾我等師に學びたる時のみならず既に業を卒へて前途執るべきの方針を議する時に當りても意氣投合せり。

第二、此外更に我等の同心一致を鞏固破るべからざるものとして守りたる他の原因あり蓋し我等は彼此古郷の著名なるを以て誇るに由なく又我が富み榮えて彼が貧困に苦むと云ふこともなく我等の財產は猶我等の感情の如く程度相等しかりき。家柄も我等は相同じくして事々物々皆我等の和睦に助けたり。

第三、然るに彼れ幸福なる者が修道の生活を爲し眞實の知識を求めんとするに當りて我等の均勢は破れたり彼の爵は輕きものとして高く揚げられ我は猶世俗の希望に束縛せられて己の爵を卑うし壯年の空想にて之を重くして低下したり。此時に於て我等の友誼の固きこと猶舊の如くなりしと雖も同居は此に中絶したり蓋し業同じからざるを以て共に住することは能はざればなり。我も亦稍世の暴風を脫するに當りて彼双手を伸べて快然我を受けたりと雖も其時も我等は舊時の平等を守る能はざりき彼は時日を以ても我を凌駕し大なる熱心を表して復た我より高尚となり至高の點に達しだ

第四、然れども彼は善良にして且我等の友誼を重んずる人なるを以て他の衆人より辭して曾て希望せし如く我と相交はりしも我の緩慢之が妨碍と爲れり。夫の裁判の傍聽を好み劇場の娯樂に耽る者は圖書と親しみ決して外出することなき人と屢〻光陰を消る能はざりき。然れども從前の妨碍を排して我を彼と同一の生活に引付くるに及び彼は其の夙に懷きたる所の希望を表白して片時も我を棄てず我に勸告するに我等各己の家を棄て二人共に同住すべきを以てし我亦之を諒とし殆と實行せられんとしたり。

第五、然るに母の斷えざる懇願我をして彼に此快樂を得せしむるを妨げ若くは寧ろ我の彼より此賜を受くることを妨げたり。我が希望母の知る所となるや母は我手を執り己の奥の居間に導き入れ我を產みたる臥床に坐せしめ熱涙滂沱切々として曰く『妾は汝の善良の父と同住の樂みを享有したること久しからず是れ神の聖旨の然らしむる所なり（聖金ロイオアンの母アンフーサは二十歳にして寡婦となれり）彼は我が汝を產みて病み惱める後間もなく逝世りし爲め汝は孤兒と爲りて我は早過ぎの寡婦となり具に寡婦の苦辛を嘗めたり此苦辛や實地經驗したるものにして始めて能く知るべし。父の家を出でゝ日猶淺く未だ經驗を積まず俄に凌ぎ難き悲みに襲はれ年齡にも天性にも數倍する煩慮を負擔するに至りたる少女の心中の動悸波瀾は言語の得て形容すべきものなし。彼が婢僕の粗略を正し其過失を戒め親戚の奸計を挫き收稅吏の壓制と其收稅の嚴重なる督促を毅然として凌ぐべきは言ふまでもなし。此外若し夫たる者死後に子を殘したりとせんに其子假令女子なりとするも母の配慮を煩すこと多く唯費用と心配之に伴はざるも男子なるに於ては母をして日々言ふべから

ざる危惧の念を懷かしめ煩慮せしむること更に甚し。母が其子に善き教育を與へんとして費すべき金の如きは固より妾の言はざる所なり。然れども此等のもの一も妾をして再嫁し汝の父の家に他の夫を入らしめず乃ち妾は種々の心配の裡にありて能く忍び寡婦の慘憺なる爐より逃け去らざりき、妾の心を固めたるものは第一上よりの佑助にして次に此憂悲の中に於て妾に少からざる慰藉を與へたるものは妾が常に汝の顏を眺めて其顏の中に亡き人の活きたる確なる保を見たることなり。故に汝が猶嬰兒にして漸く舌縺れして小兒の殊に兩親に悅ばるゝ時汝は妾に多くの悅樂を與へたり。妾が毅然として寡居を守り寡居の需要に汝の父の財產を蕩盡したりとて妾を非難する能はず此厄に罹りたる不幸の孤兒多きは妾の知る所なり。妾は此財產を委く完全に保管し同時に汝に最良の教育を與ふるが爲に要する費用は之を惜まずして妾が父の家より出づる時持ち來りたる金を之に用ゐたり。妾の今之を言ふは汝を譴責せんが爲めなりと思ふなかれ否妾は唯此等の事の爲め汝に一の慈憐を請はんとす願はくは妾をして再ひ寡婦たらしめ再び悲哀に陷らしむる勿れ既に鎭まりたるものを再び燃え起す勿れ姑く妾の終焉を待て。妾の死ぬるも恐らく遠からざらん。年若き人々は高齡に達せんことを期待すれども我等老年の者は死の外毫も望む所なし。妾を地に付して汝の父の骨に合するに及びて望みの如く遠方の旅行を企てゝ海をも渡れ其時に及んでは何人も妨ぐる者なからん惟妾の生氣ある間は忍びて妾と同居せよ汝に何等の害を加へざる妾を災難に罹らしめて徒らに神の怒を招く勿れ。妾若し汝をして世事に齷齪せしめ汝の事を慮るに至らしめたりとて妾

を非難するを得べくんば天然の法をも教育をも習慣をも其他何事をも意に介せずして妾より去ることを猶悪友と敵より去るが如くせよ唯妾若し一生涯の間汝に完全の安慰を與へんとすることに力を竭さんには餘事は姑く措き少くとも此鎖鑰は汝をして妾の側に抑留せしめん。汝は汝に多くの友ありと云ふと雖も彼等の中何人たりとも汝に斯かる安慰を與ふる者なし何となれば假令汝の幸福を慮る者ありとも妾の如く深く慮る者あらざればなり』と

第六、母は我に語ること娓々として盡きず予は之を我が益友に告げたるも彼は此の言を諒とせざるのみならず更に熱心に我に勸說するに前の希望を履行せんことを以てしたり。我等斯かる狀態にありて彼は屢〻我に懇求し我之を肯んせざりし時に當りて俄に我等兩人を驚かしめたる噂起り我等を主教の位に昇さんとする風說傳はりたり。我此報を耳にするや恐怖と疑惑の念に襲はれたり即ち一には人々が我が意旨に反して我を任命せんことを恐れ二には如何にして人々が我に斯かる鑑定を下したるやをつく〳〵考ひ深く己を省みるも自ら斯かる名譽を受くるに堪ふるものを見出さゞるに依りて疑惑の念禁ずる能はざりき。益友我に來り我を以て恰も此報を聞かざる者の如くに見做して窃に之を我に傳へて此事件に就きても亦從來の如く行動意見を同うせんことを請ひ逃げ隱るゝか選ばるゝか何れの途を執るとも彼は我に從ふの決心ある旨を打明けたり。是に於て我は彼の決心あるを知り若し我が往弱に由りてハリストスの牧群をして斯くも人民の指導者たるに適する好箇の青年を失はしめたらんには教會全般に害を及ぼすべきを思ひ從來未だ曾て一意思たりとも彼に秘したることなきに拘はらず此事に

關する意見を彼に打明けず今急ぐの必要もあらざれば此協議は他日に延期して可なりと告げ深く此事を慮るに及ばず且若し實際斯かる事柄に遭遇したらんには同心一體の我を堅く恃むべきことを悟得せしめたり。數日を過ぎて我等を按手せんとする者來りしが此時予は已に匿れたりしに毫も此事を知らざる我が友は他の或口實の下に誘はれ我も亦我の彼に與へたる約に應じて必ず彼に傚ふべく若くは寧ろ彼は我に傚はんと期待して此輒を受けたり。席に在りたる者の中彼が拔擢せられたるが爲め憂色あるを見て『人々が更に果斷に富むと見做したる人―我を指して云ふ―が頗る謙遜して諸神父の決斷に服從せし時に當りて此の更に思慮深き温厚の人が抵抗し傲慢し執拗固辭抗辯するが如きことあらば至當にあらざるべし』と絶叫して益〻疑惑を增さしめたり。彼此言に聽從したりしが我の逃げ匿れたるを聞くに及び大に悲みて我に來り我が側に坐して言ふ所あらんとせしも心氣鼓動して言語を以て心中に蟠れる憂悲を述ぶる能はず言はんとして止まりたり何となれば談の口より發するに先だちて憂悲は之を止めたるなり。我は彼の涙潸然として心中煩悶の甚しきを見且其原因を知るを以て莞爾として大に喜ぶの意を表し手を取り接吻して我の策略が我が平生希望せし好結果を奏したりとて神に感謝したり。彼は我の欣々快々然たるを見且夙に我より彼に對して此策略の使用せられたるを知りて煩悶益〻甚しくして慨然たりき。

第七、彼心中の煩悶稍〻鎭まるに及び謂て曰く汝既に我を蔑視して毫も我に意を注がずとするも……但し予はその何の故たるを知らず……少くとも汝は汝の名譽を慮るべきは當然なるに今汝は衆人をして

漫評せしむるの端を開きたり人皆汝が虚榮の爲め此務を辭したりと云ひ汝を此非難より辯護せんとする者一人もあるなし。若し夫れ我に至りては多くの人々日々我に來りて罵詈するを以て外出するだも能はず。市中に於て知己の我を見る者あれば傍に連れ往き て多くは我を罵倒す。彼等曰く『彼は汝に對して己に關する所のこと一も秘したることなきゆゑ汝は能く彼の意嚮を知るを以て之を隱蔽せずして我等に告ぐべかりしなり然らば我等固より彼を捕ふるの處置を執りしならん』と。然れども我は赧然として汝の宿望我の知る所に非ずと云ひ彼等をして我等の友誼を以て僞善的なりしと思はしむるを耻つ。若し此事果して當然にして汝亦此の今我に對する仕打の後猶之を改めずとするも多少我等のことを知れる他の人々より我等の善からざる關係を秘すること必要なり。彼等に

對して我等の關係の眞相を暴露するは我の敢てせざる所なり故に已むを得ず默して瞑目俯視し逢ふ人あれば之を避け人に逢はざらんことを努む。我若し最初の非難(友誼の不誠實なること)を免るとするも彼等は我を罵りて詐僞と爲さん。汝がワシリイをも汝の秘密を知るべからざる他人と比すべしとは彼等の決して首肯せざる所なり。然れども汝の意既に此の如くなるを以て我亦多く此事を意に介せざるべしと雖も他の非難の侮辱は如何にして之を凌ぐべきか。或者は汝を以て傲慢なりとし又或者は好名心に驅らるゝものなりとし又更に容赦なく兩ながら我等に之れありとして非難する者の中には我等が選擧者を辱めたりと言ふ者あり、曰く『選擧人は多くの尊敬すべき人々を棄てゝ昨日まで俗塵に耽り暫時の間端正なる態度を執り灰色の衣を纏ひ謙遜の者の如く裝ひたる少年を

選んで俄に彼等の夢想にだも思はざる位に昇せたる爲め大侮辱を蒙むれるも是れ彼等の自業自得なり。夫の幼年より老年に至るまで苦行を繼續したる者は從屬者と爲りて治理の標準とすべき法律を聞きたることすらなき小兒は彼等を治理す』と。彼等は此の如き非難と更に甚しき罵詈の言を以て常に我に附き纏ふも我は之に對して辯解するの方を知らず請ふ汝我に告げよ。按ずるに汝は漫然故なく逃げ匿れて公然斯かる偉人等に仇を買ひたるものに非ざるべく必ずや深思熟考の上確乎たる目的を以て此の如きことを決行したるならん、此に由りて汝亦必ず辯解の辭あるならんと推測す。我等は夫の非難者に對して如何なる至當の理由を提出することを得べきか請ふ我に告げよ。汝が我を遇するに不條理を以てしたることに對しては我汝を咎めず汝の欺瞞、汝の變心、汝が從來我より利用したる好意の爲にも汝を咎めず。我は我が靈魂を提げ來りて汝の手に渡したるに汝は狡猾に我を遇し恰も惡友を警戒するもの丶如く待遇したり。汝若し此決心(即ち主教に選ばるゝこと)を有益と認めたらんには汝も之が利益に與かるを辭せざるべく若し有害と認めたらんには汝の言に依るに汝が常に衆人よりも重んじたりと云へる我をも此害より預防するこそ當然ならめ、而も汝は我をして陷阱に陷らしむる如き事を行ひ淡泊に欺騙なく汝と語るに慣れたる者に對して欺騙僞善到らざるなし。然れども前述せし如く我は之が爲め毫も汝を非難せず又汝が曩に屢〻我等に滿足と少からざる利益を與へたる協議を中絶して我を孤立とならしめたることの爲にも汝を咎めず我は悉く之を放棄して默々として穩に之を忍ばん但し之を忍ぶ所以は汝の我に對する擧動穩なりしが故に非

す我が汝と交を訂せし日より我は汝をして決して汝が我を煩悶せしめんと欲したることに就て推諉せしむるの必要にまで至らしめざるべしとのことを我が規箴としたるが故なり。汝が我に少からざる害を及ぼせることは同心一致相互の愛を以て防衛することの我等に取りて甚だ利益なりとのことに就き他の人々が常に我等を指して言ひ又我等自ら己のことを指して云ひたるを思はゝ汝亦自ら之を知らん。我等の同心一致が他人に利益を與ふるを得べしとは我の決して思惟せざる所なりしも他人は皆我等の同心一致が他の多くの人々にも少からざる利益を與ふべしと云ひ予は唯少くとも我等は之に由りて少からざる利益を得我等を攻擊せんと欲する人々をして隙の乘ずべきなからしむべしと云へり是れ我の常に汝に記憶せしめて止まざりし所なり。今や困難の時となり人の災厄を望む者多く誠實の愛は消え失せて陰險なる怨恨之に代り我等は網の間を歩み城壁に由りて歩む(シラフ九の十八)我等の不幸に陷るを見て喜ばんとする人多く彼等は到る處我等を圍繞し惻憾の情を發する者一人もなく假令之れあるも甚だ少し。宜しく愼みて我等相離るゝに及び大なる嘲笑を招き更に大なる害を蒙らざらんことを誡めよ。兄弟は兄弟に由りて助を得ること堅き城の如く嚴めしき國の如し(箴言十八の十九)。此一致を破る勿れ此の墻圍を毀つ勿れ。我が絶えず之を汝に言ひたるは我に一點の疑心なく全く汝を我に對して健全なるものと見做し單に感情の溢るゝ餘り壯健の者に醫治を勸めんと欲したるのみ然れども今明かになりたるごとく病者に藥を與へたりとは我の知らざりし所にして我不幸の者は斯くして毫も得る所なく斯かる焦慮よりして我の爲に何等の利益を

も生せざりき。汝俄に悉く此等の焦慮を排し我を空船の如く茫々たる大海に放下したるを思はず我の鬪ふべき怒濤の恐るべきを想像せざりき。若し讒誣若くは嘲笑若くは其他何等かの侮辱不快のこと我を襲ふことあらば(此の如きことに遭遇すること往々之れあるべきは必然なり)我果して誰にか頼らん。我が悶々の情を誰にか告げん。誰か我を扶け侮辱者を排し彼等をして再び侮辱を加へしめず我を慰め我を勵して他人の陋劣の所爲を忍ばしむる者ぞ。汝ば此の殘酷なる鬪爭より遠ざかりて我が聲をすら聞くこと能はざる事となりたるに依り此の如き人一もあるなし。汝が斯くも大なる惡を行ひたることは果して汝の知る所なるか。少くとも敗北の後汝が我に如何なる致死の打擊を加へたるかを認むるか。然れども此事は措て問はざらん既に爲したることは矯正するに由なく進退維合るの狀態にありては活路を求むるに由なし。然れども他の人々に向て我等何と言ふべきか。彼等の非難に對して如何に辯護すべきか。

第八、金口。我答へて曰く請ふ意を安んせよ我は唯此事に就きて辯明するの覺悟あるのみならず汝が我を宥恕することに就きても能くする限り辯解せんとす。而して若し可ならば予は首として此點より我が辯護を始めん。我若し他の人々の說を顧み我等に對する彼等の非難を絕つの處置を執りて猶且諸人中最も我の愛する所にして我を憐惜するの餘り其言に依るに我の彼に對して罪あることに於てすら我を罪するを好まず己のことを意に介せずして依然我のことを慮る者をして我の無罪なることを信用するに至らしめず若し此の如き人に對して彼が我のことを慮ることを表したるより

も深く不注意を表したらんには我は甚だ無分別にして忘恩の者たらん。夫れ然り我は果して何事にて汝を侮辱したるか。我は此點より辯護を試みんとす。汝に對して策略を用ひ我が意嚮を秘したるを以て侮辱したりと云ふか。然れども此事たる汝の欺かれたる時汝の利益ともなり又我が隱匿を以て汝を其手に渡したる者の爲にも利益となりたり。若し隱匿なるものは諸般の關係に於て惡くして利益の爲めなりとも決して之を利用すべからずとせんには我は甘んじて汝の好む所の罰を受けん或は寧ろ汝は決して我を罰することを肯んせざるを以て我自ら夫の裁判官が告訴者の告發する犯罪人を罰する如く已を處罰せん。唯若し隱匿は常に必ずしも有害に非ずして之を實行する者の意嚮に依り惡ともなり或は善ともなるとせんには唯汝が欺かれたりとの一點にて非難するを止め此策略の惡に使用せられたることを證明せよ苟も證明せられざる以上は非難詰責すべからざるのみならず恩を謝せんと欲する者たらんとせば策略を用ゐたる者を賞贊するこそ當然ならめ。期に適ひ且善意を以て行はれたるの策略は利益を來すものにして之を利用せざるが爲め罰を受けたる者多きは往々見る所なり。試に古代より始めて著名なる將軍の事蹟を見よ然らば汝は彼等の勝利が奇計の結果たるもの多きを占め而して此の如き名將が堂々對陣の戰爭にて勝ちたる者より多く稱揚せらるゝを見ん。堂々たる對陣の戰爭にて勝つ者は金と人とを費すこと莫大にして勝利よりして得る所の利益毫も之れあるなく戰勝者は兵員の絶滅と國庫の蕩盡の爲め災を蒙ること毫も戰敗者に劣らず且彼等は充分に勝利の光榮を以ても樂む能はず何となれば勝利の光榮なるものは時として戰敗

者にも屬すること少からざるものあり彼等は身体にてこそ敗れたれ精神にて勝ち且若し其打擊に依りて意氣沮喪せず戰死を見て悲歎に沈まずんば決して勇氣を失ふものに非ざればなり。而も奇計を以て勝ちたる者は敵をして災厄に陷らしむるのみならず天下の嗤笑を買はしむ。前の場合に於ては兩ながら(勝者も敗者も)等しく勇氣の爲め稱賛せられ後の場合に於ては智慮に關しては然らざるも勝利は全く勝者に歸して且其の城中に手疵を受けざる勝利の吉報を傳ふるもの亦是れ重要視すべきことなり。金錢の豐富と人間の多數とは靈魂の智慮と同一の論に非ず前者は人絶えず之を戰に用ゆる時は消盡し使用者之を失ふも智慮なるものは人之を實地に使用するに從ひて益〻增加するを例とす。且獨り戰爭に於てのみならず平時に於ても策略に由りて至大緊要の利益を得ることあり而して是れ唯社會の公事に於てのみならず家裡の事に關しても然るものにして夫の妻に對し妻の夫に對し父の子に對し相互に對し且子の父に對する事に於てすら利益を來たすことあり。例へばサウルの女の如き若し父に對して策略を用ゐざりしならんにはサウルの手より己の夫を救ひ出すに由なく其兄弟(イオナファン)亦彼女の救脫したる人を新なる危難より救はんと欲して妻(ダワィドの)と同一の手段を使用したり(列王紀上十九及び二十章)。

ワシリイ曰く此等の事たる皆我に關係せず我は敵に非ず惡友に非ず侮辱を加へんと欲する者に非ず全く之と反對なり我は常に我が意思を悉く汝の意嚮に委ねつゝ汝の命ずるまゝに行へり。

第九、金口。然れども最も尊敬する最良の者よ余が豫め獨り戰爭に於て敵に對してのみならず乃ち平時に於て親愛する者に對しても

策略を用ゆること益ありと云へるは則ち是れが爲なり。此の如く獨り策略を用うる者のみならず之を施さるゝ人に對しても實際利益あることを知らんとせば醫師に就きて彼等が如何にして病者を醫すかを問へ然らば彼等が常に必ずしも己の醫治方のみを以て足れりとせず時として策略をも用ゐ其助けに由りて病者の健康を回復すとのことを聞かん。病者が執拗にして病勢甚しく募り醫師の勸告も其の甲斐なき時は醫師は已むを得ず恰も舞臺に於けるが如く眞相を隱蔽せんとして策略を用うるに至る。若し好まば我が聞く所に依るに醫師の使用する多くの策略中の一例を汝に告げん。或人俄に熱病に罹り熱氣募りたるに熱氣を消すべき方法は病者悉く之を排し多く酒を飲みて苦しき熱氣を消せんと欲し見舞ふ者に酒を與へんことを請へり。然れども若し諾して其の意の如くしたらんには熱病を募らしむるのみならず不幸なる病人をして或は發狂せしむるに至らんも知るべからず。醫術も効を奏せず方法も盡き果てゝ全く用ゐられざる時に當りて應用せられたる策略は余の下に言ふ如く効を奏したり。醫師は燒釜より取立ての磁器を取り之を酒に浸し空となして取てあげ之に水を滿て日光にて策略を看破せられざらんが爲め多くの帷を以て室内を暗くせしめ器物に酒を滿たしたるものゝ如くにして病者に之れより飲ましめたり。病者は器物を手に取るに先だち逸くも酒の香に迷はされて其の與へられたるものゝ何たるを辨へんともせず香氣にて酒なりと信じ暗きに欺かれ太く渴望するまゝに大に喜んで其與へられたるものを飲み乾し滿腹するに及んで忽ち熱の冷却したるを感じ危險を免れたり。汝策略の利益なるを見るか。醫師の策略を悉く枚擧したらん

には言に終なからん。啻に身體を癒す者のみならず靈魂の病を醫すことを慮る者も亦往々此の如き治療方を利用することを指示するを得べし。福たる者(パワェル)は此の如くにして數千のイウデヤ人をハリストスに歸せしめたり(行實二十一の二十至二十六)彼はガラティヤ人に向ひて『若し爾等割禮を受ければハリストスは更に爾等に益なし』と云ふに拘はらず此主意を以てティモフェイに割禮を行ひたり(行實十六の三、ガラティヤ五の二)彼がハリストスを信ずるに於ては律法に由りて義とせらるゝことを無益と見做せし(フィリッピ三の七至九)に拘はらず律法の下に居りたるもの之が爲なり。此の如く策略なるもの苟も惡き目的を以てせずして用ゐらるゝに於ては其効力至大なり或は寧ろ之を策略と稱せずして窮境に際して多くの遁路を求めしめ靈魂の缺點を矯正するに助くる先見、智慮、方便と稱するを可なりとせん。例へばフィチエスの如き一擊二人を刺し殺したり(民數記二十五の八)と雖も予は之を凶殺者と稱せず又イリヤの如きをも其將と共に百人の(殺されたる)兵士の爲めに悪魔に事ふる神主を殺して鮮血を漂はしたる爲め(列王記四の一、同上三の十八)之を凶殺者と稱せず。若し我等此主旨を度外視し行ふ者の眞意に意を注かずして行爲の一方のみを見たらんには恐らくアウラアムをも目して子殺しの罪ありとし其孫及び子孫にも凶行姦譎の罪ありと爲すに至らん何となれば甲(イアコフ)は家督の權利(其兄の)を占領し乙(モイセイ)は埃及の財寶をイズライリの軍に移したればなり(創世記二十七、出埃及記十二の三十五、三十六)否々斯かる狂暴のことを敢てすべからず。我等は彼等を罪せざるのみならず之が爲め彼等を讃榮す何となれば神自ら其行の爲め彼

等を讃榮したればなり。當然欺騙者と稱すべきは惡意を以て此方法を利用する者にして智慮を以て行ふ者たらざるべし。策略を以て至大の利益を來さんが爲め往々之を用うるを要することあり而も直路に由りて進む者は己の意嚮を秘せざる者に大害を加ふることと尠しとせず。

第二說

策略の力を善に使用するを得べく且之を策略とも稱すべからずして嘉みすべき先見と稱すべきことに就きては更に多く言ふを得べしと雖も以上說く所のもの既に證明の爲め充分なるを以て徒らに此事を絮說するは煩はしきことならん唯汝自ら我が行ひたる擧動が果して汝の益となりたりや否を確むべきのみ。

ワシリイ曰く先見とか智慮とか若くは其他汝の名つくるに任かする此事よりして如何なる利益我が爲に生じ我をして汝に欺かれたるに非ざるを悟るを得せしむるものぞ。

イオアン。我曰くハリストス自らの言に依りハリストスに對する愛の證と爲るものを行ふ者となるの利益より緊要なるものあり得べきや。彼は使徒中の長たる者に向ひ『ペトル爾我を愛するか』と云ひペトルその愛するを自認するに及び彼は爾我を愛せば『我が羔を牧せよ』との言を加へたり(イオアン二十一の十五、十六)師が門徒に其の愛せらるゝや否やを問ふは自ら之を知らんが爲に非ずして(蓋し衆人の心を鑒みる者豈に知らざるの理あらんや)乃ち彼が羔の群を牧することを如何に焦慮するやを我等に諭さんが爲めなり。若し果して然りとせばハリストスの貴重視する勞を執りたる者に得て

形容すべからざる大賞の備へられたる所以も亦明かならん。若し我等すら我等の僕婢若くは家畜の群を慮る人々を見ば假令金にて此勞を執るにせよ彼等の煩慮を以て我等に對する愛の兆と爲すとせんには金又は其他のものを以てせず己の死を以てこの羔の群を獲得し價の代りに己の血を與へたる者は如何なる賜を以て之を牧する者に酬うべきか。故に門徒が答へて『主よ爾は我が爾を愛するを知る』と云ひ其の愛する者を擧げて己の愛の證者と爲すに及び救主は此に止まらずして愛の兆をも示したり。蓋し此時彼の示さんと欲せしはペトルが如何に深く彼を愛せしかのこと―此事は多くの事件に由りて既に明かなる事なり―よりも彼自らが如何に己の教會を愛するやのことにしてペトル及び我等衆人に諭ずに我等も亦深く之を慮るべきことを以てせんとせり。抑〻神が己の獨生の子を惜まずして之を付せしは何の爲めぞ(ロマ八の三十二、イオアンの十六)是れ彼と仇敵たりし人々を己と復和せしめ之を『選ばれたる民』(ティト二の十四)と爲さんが爲めなり。(神の子が己の血を流したるは何の爲めぞ。彼がペトル及び其後嗣者に委ねたる羔を獲んが爲なり。ハリストスが『孰か忠にして智なる僕にして其主が諸僕の上に立てしむる者ぞ』(マトフェイ二十四の四十五)と云ひしは偶然に非ず。此言は復た一見疑惑を挿むの狀あるに似たりと雖も之を言ひし者は一點の疑惑を挿まず彼がペトルに己を愛するや否を問ひたるは門徒の愛を知るの必要あるが爲に非ずして己の愛の非常なるを示さんが爲めなりしが如く此に『孰か忠にして智なる僕ぞ』と云ふの言も忠にして智なる僕を知らざるが爲に言ひたるに非ずして此の如き僕を得ること甚だ稀にして家を督ることの如何に重要

なるかを示さんが爲めなり。其報賞の如何なるかを看よ』彼を立て
て其一切の所有を督らしめん』と(同上十七)

第二、汝猶我を疑ふて神の一切の所有を督るの任に當りハリストス
の言ひし如くペトルの之を行ひたるが爲め他の諸使徒に卓越する
を得たるが如き事を行ふの汝に對して不良の策略を施したるもの
と爲すか。ハリストス曰くペトル爾我を愛すること彼等に過きた
るか我が羔を牧せよと。ハリストスはペトルに向ひて爾若し我を
愛せば齋を爲し地の上に臥し絶えず警醒し虐げらるゝ者を防ぎ孤
兒に對して彼等の父と爲り夫の代りに其母と爲れと云ふを得べか
りしも彼は此等のことを悉く棄てゝ何と言ひしぞ他なし我が羔を
牧せよと云ふ是なり。余が前に述べたる所のことは被牧者中獨り
男子のみならず婦人とても容易に行ふを得る者多かるべしと雖も

苟も教會の司長と爲り多數の靈魂のことを慮るの任を受くるを要
する時には女子一切と男子の多數が此大事業より除かれ超然衆人
に卓越し精神的道德にて他の人々に超越すること猶サウルが身幹
の高さにて悉くのエウレイ民に超越したるが如く(撒母上十の二十
三)又はそれよりも更に卓越する者出でさるべからず何となれば此
場合に於ては身幹にのみ意を注かず牧者と被牧者の間の區別が恰
も天賦の知識を有するの人間が無魂無心の者に卓越するが如く若
くはそれ以上に卓越せざるべからず更に緊要のもの危殆に瀕する
が故なり。若し狼に羔を奪はれ又は强盜に掠奪せられ疫病又は其
他不幸の事件にて羔を滅す者は其群の主人より寛恕を受くること
あるべく假令計算報告を請求せらるゝも金錢に於ける損失に過ぎ
ざるべしと雖も此のハリストスの有智の群なる人間を依託せられ

たる者にして此の如き羔を滅ぼすに於ては第一財産にあらで己の靈魂に害を加ふるものにして次に其の任も頗る至要且至難なり。彼は狼と鬪ふに非ずその恐るゝ所のもの強盜に非ずその慮る所のもの疫病を群より豫防せんとすることに非ず然らば何人と戰ひ何人と爭ふか。請ふ福たるパワエルの言ふ所を聞け彼曰く『我等の戰は血肉に於てするに非ず乃ち首領に於てし權柄に於てし此世の暗昧の世君に於てし天空にある凶惡の諸神に於てするなり』(エフェス六の十二)と。視よ鐵にて武裝せられざるも己の實體の裡に有らゆる武器の代りに充分の勢力を有する敵猛烈なる軍隊は恐るべきほど多きに非ずや。汝は此群に襲擊を加ふる他の勇悍殘酷なる軍をも見んと欲するか。同じく夫の高處(聖書の)よりして亦之を見るを得ん。前の敵のことを我等に告げたる者は左の言を以て此の敵のことを我等に指示す曰く『肉の行は顯著なり即ち姦淫、邪淫、汚穢、邪侈、拜偶像、巫術、仇讐、爭鬪、娼嫉、憤怒、分爭、讒言、隱刺、驕矜、混亂なり』と(ガラティヤ五の十九、二十、コリンフ後十二の二十)此他勝て數ふべからず蓋しパワエルは悉く此に枚擧したるに非ず此に因りて他のことをも推せしめんとしたるなり。且夫れ無魂無心の者を牧する牧者にありては群を掠めんと欲する者番人の逃ぐるを見る時は之と爭ふを止めて群を掠むる一事にて滿足すと雖も此に於ては敵假令悉く群を掠むるも猶牧者より去らず更に猛烈に襲擊し一層猖獗を極め結局勝を制するか又は自ら斃るゝに非ずんば鬪を止めず。加之羔の病は飢餓にせよ疫病にせよ創傷にせよ將た其他凡そ害を加ふるものは皆明かにして此事たる病の醫治に助くること少からず。此外他に病の醫治を速かならしむ

る至緊至要のものあり。何ぞや他なし羊を牧する者が假令羊の群にして醫治を受くることを好まざるも之をして強て受けしむるの全權を有し檢束するの必要あり其事利益なるに於ては彼等を縛りて久しく出でざらしむるを得べく甲の食の代りに乙の食を與へ水を節する等其他苟も獸類の健康に取りて有益と認むる所のものは頗る便宜に之を實行するを得

第三、然れども人間の病は第一、人間の目にて看破すること容易ならず蓋し人の事は人の内に居る神の外人誰か之を知らん(コリンフ前二の十一)。病の性質を知らず且往々其の果して有病なるや否やをも知らずして如何にして疾病に對する治療を施すを得べき。若し病症にして發見せられんか醫師は更に困難を感ず何となれば醫師は牧者が羊を牧するが如き全權を以て悉くの人々を醫治すること能はざればなり。之を醫治するに就ても束縛して食を節せしめ檢束するの必要あるも醫治を受くるの權あるものは醫治を勸告する者に非ずして疾病に苦む者なり。夫の偉人(パワェル)も之を知りてコリンフ人に謂て曰く『我等は爾等の信に主たるに非ず乃ち爾等の喜を助く』(コリンフ後一の二十四)と。「ハリスティアニン」には首として强迫手段を以て罪に陷る者を矯正するを禁せらる。外界の(異教の)裁判官は國法に照らして犯罪人を裁判に付し彼等に對して大なる權力を有するを示し强制的に彼等を其惡習慣より抑止するも此にては罪人を矯正するに强制手段を以てせずして宜く勸告を以てせざるべからず。故に惱む者をして甘んじて司祭の醫治に服せしめ且之をして治愈の爲め感謝の念を起さしめんが爲めには多くの方便を要す。若し縛られたる者自ら縛を釋かば(蓋し彼之を釋

ことを得)益〻己の災を増し又若し鐵に等しく截斷するの言を蔑視せば此輕蔑を以て己に新たなる傷を加ふるものにして醫治の方法は偶〻以て危篤なる病の原因と爲らん蓋し何人と雖も强制的に病者の希望に反して之を治愈することを能はざればなり。

第四、然らば如何にして可なるべき。若し大なる醫治を要する者を輕々に遇ひ切開を要する者の傷を切開すること深からざるに於ては傷の一部は之を愈すも一部分は然らざるべく而して若し容赦なく相當の切開を爲したらんには病者恐らく時として苦痛に堪へず俄に治療方をも繃帶をも悉く放棄し軛を脱し縛を解きて深淵に投せんも知るべからず。余は惡の絶頂に達したる多くの人々を擧示することを得何となれば彼等の罪に相當したるの罰彼等に課せられたればなり。罰の量に從ひて罰を定むることは決して輕忽にすべきものに非ず宜しく罪人の意嚮を斟酌すべきものにして烈目を縫ひ繕はんとして更に大なる綻を生じ墮落者を救濟せんとして更に其墮落を甚しからざらしめんことを慮らざるべからず。往弱無氣力にして專ら此世の快樂に耽り且己の身分と權力を以て自負する者漸を以て己の罪より遠ざけらるゝに於ては假令充分ならずとも一部分にせよ其罪僻より救脱せらるゝを得べきも俄に之に悔悟すべきを勸告するに於ては彼等をして毫も矯正する所あらしめざらん。靈魂にして若し一たびたりとも强制的に侮辱せられたらんには無感覺となりて其後には既に温和の言にも聽從せず威喝にも屈せず惠を施すも感動せず夫の預言者が誹りて『爾娼妓の額あれば肯て耻ぢず』(イエレミヤ三の三)と云ひし城よりも遙に惡しきものと爲る。故に牧師たる者は四方より靈魂の狀態を鑑察せんが爲め多

くの智慮と多くの目とを有せざるべからず。殘酷なる治療を受くるに堪へずして己の救贖に對して失望落膽する者多きと共に之に反し罪に相當する罰を受けずして緩慢怠惰に耽り益〻惡くなりて益〻多く罪を犯さんとする者あり。されば司祭の義務とする所は決して此の如き人々を試驗せずに放棄することなく普く嚴密に探査して己の方より相當の處置を用ゐ以て其盡力をして無効に歸せしめざらんことを慮るにあり。且司祭の働きの困難なるは獨り此點に於て見るを得べきのみならず教會より分離したる會員を教會に復歸せしむることに於て見るを得べし。羔の群は己の牧者の後に從ひその導く所に往くものなり若し斯かる羔にして正しき道を離れ良き牧場より遠ざかりて荒蕪嶮崖の方面に彷徨はゞ牧者は唯高聲絶叫して再び分離したる者を集め之を群に合するに過ぎざるも人若し正しき信仰の道より蹈み迷ふことあらんには牧師の苦心盡力忍耐を要するや夥し。人間は力を以て引去るべからず恐怖を以て强うべからず乃ち宜く諄々勸告して其の曩に離れたる眞理に復歸せしめざるべからず。故に毅然たる意氣を懷きて自ら沮喪せず迷へる者の救贖に對して失望せず絶えず『神或は彼等に悔改を與へて眞實を識らしめ惡魔の網より脫れしめん』(ティモフェイ後二の二十五、二十六)とのことを思念し且言はざるべからず。是れ主も門徒と談話するに當りて『孰か忠にして智なる僕たる』(マトフェイ二十四の四十五)と云ひたる所以なり。自ら苦行する者は己一人に益を爲すに過ぎざるも牧師の働きの益は全民に及ぶ。貧困者に金を施す者若くは何等かの方法を以て壓虐せらるゝ者に助くる者は隣に幾分かの益を來たすと雖も司祭より少きこと猶身體の靈魂より卑き

が如し。故に主が彼の群を慮ることが彼自身に對する愛の徵なり
と云へるは誠に宜なり。

ワシリイ。汝豈主を愛せざるか。

金口。我は愛す且決して愛することを止めず然れども我が愛する所の者を辱しめんことを恐る。

ワシリイ曰く豈此の謎より解き難きものあらんや。ハリストスは己を愛する者に彼の羔を牧せんことを命じたるに汝は之を命じたる者を愛するが爲なりとて之を牧することを辞す。

金口。我曰く我が言に何等の謎もあるなし反て我が言や頗る明白且單純なり。我にして若しハリストスの欲せしが如く此職を行ふの能力を有して之を避けたらんには我が言を聞て疑團を起すこと當然なるべきも我が精神的の荏弱我をして此の任に堪へざらしむるに於ては我が言豈亦説明を要せんや。我が恐るゝ所はハリストスの群を健全鞏固のものとして引受け乍ら後不注意に由りて之に害を加へ之を瀆ひ且救ふが爲め己自身を與ふるほど愛したる神の怒を招がんとするにあり。

ワシリイ曰く汝の之を言ふは戯るゝのみ若し戯談に非ずとせば此の汝が我が煩悶を散せんと努めたる言より更に能く我の實際憂悲する所以を證明するを得べき他の言あるを知らず。我は曩にも汝が策略を弄して我を交付したるを推測せしが今汝の辯解せんと努むるに及んで我は益之を確信し明々地に汝が我を何如なる災に陷れたるかを見る。汝若し汝の靈魂が此業務の重任を負ふに堪へざるを自覺するに依りて自ら此職を避けたりとせんには假令我は熱心之を希望するも先づ我をして避けしむること必要ならん。況んや

我は此事に關して我が意見を悉く汝に披瀝したるに於てをや而も汝は今唯己のことのみを思ふて我を忘れたり―嗚呼忘れたるのみなりとせば猶可なり是れ或は希望すべきことならんも―汝は故意に尋ぬる者をして容易に我を捕ふるを得せしむるが如く仕向けたり。汝は亦輿論が汝を棄てゝ我を以て偉大の人物の如くに見做すに至りたりとの辯解をも爲すを得ざらん。我は世の驚異榮譽を博したる人々に屬せず假令之を然りとするも世間の噂を以て眞理より重しとすること不可ならん。我等若し未だ曾て汝と互に親密の交を爲さゞりせば汝は世間の噂に依りて我のことを判斷する當然の理由を有すべく若し世に我を知ること汝に若く者なく汝の我が意中を知ること我が兩親及び敎育者に優れりとせんには如何なる巧言を以てするも豈能く人をして汝が故意を以て我を斯かる危險に陷れたるに非ずとのことを首肯せしむるを得んや。然れども今姑く之を措かん我は敢て汝をして之を辯解せしめず請ふ我等が非難者に答ふるに何の辭を以てすべきかを告げよ。

金口。我曰く汝はたとひ幾千度我を恕するも我は汝の前に辯解せざるまでは此事に着手せざらん。汝は我若し汝を知らずして汝を現今の狀態に陷れたらんには此の知らずと云ふの一事我を悉くの非難より免れしめて我に辯解の餘地を與ふべきも我の汝を交付したるは知らざるに由るに非ずして全く汝を知りたるに依るが故我に毫も自ら辯解すべき當然の理由なしと云へり。然れども我は全く之に反することを言はんとす何となれば此事に關しては嚴正なる調査を要するものにして苟も神品の任に堪ふる者を推薦せんとする者は世間の噂のみを以て滿足せずして之と共に先づ首として自

ら其人の材能を確めざるべからず。福たるパワェルは『亦外の人より善く證せらるゝ者たるべし』(ティモフェイ前三の七)と云ひ之を以て嚴正確實に調査することの必要を排斥せず此證を以て斯かる人人の人格を判する重なる標準と爲さず。彼は預め多くの事を云ひて後此言をも加へ以て選拔するに際しては唯此事のみを以て滿足すべからざるも此事にも意を注ぐべきを示せり。世間の噂は往々欺罔なることあるも預め嚴重に調査したる後に於ては世間の噂に依りて毫も斯かる危險に羅かるべからず。故にパワェルは他のもの丶後に『外の人より』の證言をも要求するなり。彼は單に『善く證せらる丶者たるべし』と云はず之に『外の人よりも』の言を加へ嚴正なる調査が外部の證に先だゝざるべからざるを說明せんと欲したり。而して我は汝の證明せし如く自ら汝を知ること汝の兩親に優るが故に我は悉くの非難より免かるゝを得べし。

ワシリイ曰く人若し汝を罪せんと欲するに當り汝は此の故に由りて辯解すること能はざらん。汝或は我の屢〻汝に言ひ汝の實見したる如く我が靈魂の往弱なることを記憶せざるか。汝が常に我の怯懦なるを冷笑したるは我が瑣々たる痛心の事に際して忽ち落膽したるが爲めに非ずや。

第五、金口。我曰く屢〻汝より斯かる言を聞きたるは我の記憶する所にして我之を拒まず。若し時ありて冷笑したりとせんには是れ戲れにしたるものにして眞實に非ず。然れども我は今之を爭はざら、ん唯我が汝の天賦の若干の德を擧ぐる時に當りては汝も亦我に對して誠實たらんことを請ふ。汝若し我の不誠實を責めんと思はゞ我は汝を容赦せず乃ち汝の非難するは正義に依るよりも寧ろ謙遜

に依る所以を證明し我が言の眞實なるを證するに汝の言と行とを以てせん。首として我の汝に問はんと欲するは汝が愛の勢力の如何なるやを知れりやのこと是なり。パリストスは使徒等の行はんとする悉くの奇蹟を枚擧せずして『爾等若し相愛せば人皆此に由りて爾等の我が門徒たるを知らん』(イオアン十三の三十五)と云ひパワェルは愛は『律法を盡す』(ロマ十三の十)ものにして之れなくんば賜も何等の利益を來たさず(コリンフ前十三の一、二)といへり。此の天の賜にも優るパリストスの門徒の特殊の性質たる優美なる寶は我は汝の靈魂に堅く植え付けられて豐かなる果實を結ぶものたるを見る。

ワシリイ曰く我は深く此事を慮り孜々汲々此誡を格守せんと努むるは我の自認する所なるも我は未だ其半をも履行せず汝若し諂媚を棄てゝ眞實を言はんと欲したらんには汝亦自ら之を證明せん。

金口。我曰くされば我は證據を擧げて今汝が正義の者たらんよりも寧ろ謙遜の者たらんと欲する所以を證せん。既往の事は姑く措て言はず近頃行はれたる一事件を述べ人をして我が時代の古きに依りて眞理を昧ますと思はざらしめん此の時日の近きものは我をして諂媚の言を以て事實を掩蔽するを得ざらしむ。

第六、曾て我等の一友人傲慢不遜の行ありと讒せられ頗る危險に瀕したりしに何人も汝を招かず訴へられたる者亦自ら請はざりしに汝自ら進んで危地に陷りたり。事實は此の如し然れども猶汝の言を以て汝を責めんが爲め汝の言をも記憶せん。或者は汝の斯かる熱心を非難し或者が讃美稱揚せしに汝は非難者に向ひて『斯く爲すの外なきに非ずや然らざれば危地に臨める友人を救ふの必要ある

に際し己の靈魂を犧牲として愛する所以を知らず』と云ひ以て言こそ異なれ同一の意味を以てハリストスが完全の愛を測定して其門徒に言はれたるの言を繰返したり。ハリストス曰く『人其友の爲に生命を捐つるは愛此より大なるはなし』(イオアン十五の十三)此の如く若し愛の程度此れより高きものなしとせんには汝は其堂に詣りたるものにして汝は己の行と言とを以て其の絶頂に達したるなり。是れ我が汝を交付したる所以是れ斯かる策略を憶出したる所以なり。汝は今我の汝をして此位置に至らしめたるは惡意を以てしたるに非ず危險に陷れんとするの野心を以てしたるに非ず有益なる所以を洞見したるに依るを悟りたるか。

ワシリイ曰く然らば汝は隣を矯正するが爲めには愛の力のみにて足れりと思ふか。

金口。我曰く愛の力は多くの場合に於て最も此目的を助くるを得汝若し我をして汝の怜悧なる證據をも擧げしめんと欲せば此にも着手して汝の怜悧なること愛情の深きに優るを證せん。

ワシリイ此に至りて耻ぢて赤面し且曰く請ふ我に關することは今之を措かん我は苟旦にも汝より此事を言ふを要求せざりき汝若し『外の人』に取りて正當なることを言ふことを得ば我は喜んで之を聽かん故に今此空論を棄てゝ我等が他の汝に名譽を與へたる者と又彼等を以て恰も侮辱せられたる者の如く惜む人々に對して如何に辯解すべきかを云へ。

第七、金口。我曰く是れ我の亦自ら速に轉じて言はんと欲する所なり我は汝に對して言ふことを終りたるを以て此の辯護の部分にも向はん抑彼等の非難する所は如何にして罪責は如何なりや。人々

の言ふ所を聞くに選擧人は我が彼等の我に與へんと欲したる名譽を受けざりしを以て侮辱蔑視せられたりと爲すと云へり。然れども我の首として言はんとするは我等が彼等を尊敬するに於ては勢ひ神を侮辱するに至ると見做すの時に於ては人々に加へらるゝ侮辱の如きは之を念頭に懸くべからざること是なり。憤慨する人々に取りても此にて侮辱せらるゝと爲すは余の視る所に依るに菅に危險なるのみならず極めて有害なり。苟も神に己を献げて獨り彼を恃む者は余の意見に依るに假令幾千たび其身に憂悶を經驗することあるも侮辱と見做すべからざるほど敬虔の者たらざるべからず。而して斯かる暴慢の念の我が念頭にも浮ばざりしは左の事にても之を知るに足る。若し我は汝の屢〻言ふ如く或人々の讒する如く驕傲及び名譽心に依りて此擧に出で以て非難者の説を確めたらんには我は尊敬すべき偉人にして而も我が恩人たる人々を蔑視したるものにして甚だ不義理なるべし。若し毫も不義理を行はざる人々に加へたる侮辱にして罰すべきものとせんには自ら好んで名譽を與へんと欲したる人々は如何なる尊敬をか受けざらん。彼等は我より多少の恩を受けて此恩に報を爲したりとは何人も言ふこと能はざらん之に反する者に報を爲したりとて果して何等の罰を受くべきぞ。若し此の如きこと我の未だ曾て思ひ浮ばざる所にして我は他の思想を以て自ら重負を避けたりとせんには若し我を無罪と爲すを欲せずとも我を恕するの代りに何故に我が己の靈魂を惜みたりとて我を罪するか。我は毫も此の如き人々を侮辱するの意なく辞退の一事を以て彼等を尊敬したりと思ふなり。若し我が言にして奇怪なりとするも怪む勿れ我は直に之を説明せん。

第八、當時我若し按手せられたらんには悉くの者に非ずとするも惡評を放つを以て自ら快とする人々は我と我を選びたる者に關して疑を挿み絮說するを得たるならん例へば選擧人は富に目を注ぎたりと云ひ門閥を貴ぶと云ひ我が諂媚の爲に我を此位に叙したりと云ひ甚しきは彼等が金にて我に買收せられたりと疑ひし者あるやも知るべからず或はハリストスは漁夫、天幕を作る者及び稅吏を此職に召したるに彼等は日々の勞働を爲して糊口する者を斥け世俗の學を修め安逸の生活を爲す者を採用して之を尊崇すと云ひ彼等は何故多く敎會の事業に盡力せし人々を無視して未だ曾て此事業に關係せず日々齷齪として世俗の學問に耽りたる者を以て俄に此の如き名譽の位置に昇せたりやと云ひしやも知るべからず。若し我にして此職を受けたらんには此より更に多く言ふ所ありしやも知るべからず。然れども今や然らず誹毀の口實は一切之を求むるに由なく苟も狂暴を事とせんと欲する者にあらざる以上は我を諂媚にも罪する能はず選擧者をも買收に罪する能はず。苟も名譽の位を得んが爲め諂媚を用ゐ金を費す者自ら之を受くべき時に當りて豈能く之を他人に讓らんや。是れ恰も收獲の時饒に果實を收め葡萄酒を搾酒器に充滿せんとして孜々汲々土地の上に力を費せし者果實を收め葡萄を集めんとする時に當りて他人に此の豐饒を利用せしむるに等しからん。視よ此の如き言が眞理を去ること如何に遠きも欲する者は選擧者を讒するの口實を得て彼等の選擧が健全の考慮に依りて行はれたるに非ずと云ふを得たるならん。而も我等は今彼等をして一語をも發するを許さず單に口を開くことをも得ざらしむ。此の如きこと幷に之より更に多きこと最初に喋

喋せられたるならん。而も後職に就くに及んで假令我の品行間然すべき所なきも無經驗と年齢の熟せざるとに由りて過つが如きことあらば我は日々非難者に對して辯解せんとするも力足らざらん。今は我選擧者をして此の非難よりも免れしめたりと雖も然らずんば彼等をして無數の譴責を受けしめたるならん。彼等の言ふ所恐らく底止する所なく夫の選擧人は斯かる尊重すべき大事を以て無知無謀の兒輩に托し神の群を亡しハリストス教を化して玩弄物及び笑柄と爲したりと云はん。然れども今や凡その不法は其口を塞ぐ(聖詠百六の四十二)。汝に關しても亦斯く謂ふを得べしと雖も汝は忽ち己の行を以て賢愚のことは年齢に依りて判すべからず白髮の者必ずしも老人たりとすべからず凡そ年若き輩を悉く此職より排斥せず乃ち唯信仰に由りて若き者(新領洗者)を排斥すべきを證するを得ん彼此の間の差や大なり。

第三說

我が(主教職の)名譽を避けたるは我を尊崇せんと欲せし者を侮辱せんが爲に非ず彼等に恥辱を與へんとするが爲に非ざることを證することは前述したる所にて既に足れり而して我が傲慢の意に依りて斯く行ひたるに非ざる所以は今我が力の及ぶ限り之をも汝に說明せんとす。我若し軍隊若くは國家の首長に選ばれんとするに當り斯かる意嚮を以て之に對したらんには人或は我に傲慢の意ありと疑ふを得べく又は何人も我を傲慢にも罪せずして人皆我を無分別の者と稱したるならんも(凡その)權より高尚なること猶靈の肉より高尚なる如き神品職を受けんとする時に當りては誰か敢て我を傲

慢に罪するを得ん。緊要ならざるものを辭する者を罪して無知なりとし重大のものを避くる者をば無知なりとせずして傲慢の罪ありとするは豈奇怪に非ずや。是れ恰も牛の群に對すること輕忽にして牧者たらんことを欲せざる者をば傲慢の罪ありとせずして無分別の者とし全世界を統轄し天下の兵を率ゆることを辭する者を無知者と稱せずして傲慢の者と稱するに等し。否否これを言ふ者我を罪せずして寧ろ己を罪するなり。蓋し人が斯かる位(神品の)を蔑視するを得べしとするの一事既に之を放言する者自ら此事に關して如何なる意見を有するやを證するに足る。彼等にして苟も之を緊要ならざるもの通常のものと見做さゞらんには斯かる疑は其念頭にだも起らざらん。何人も未だ曾て天使の性格に就て此の如き事を思ひ出し傲慢に依りて天使の性格に達することを欲せざる人の靈魂ありと言ふ者あらざりしは何故ぞ。是れ他なし我等在天の能力に就ては高尚の見解を有し此見解は我等をして人間が此性格より高尚なるものを想像するを得べしと信せざらしむればなり。されば我を傲慢なりとて罪する人々を傲慢に罪するこそ至當なれ。彼等にして自ら豫め此事を微々たるものと見做さゞりせば決して他人をも爾かく疑はざりしならん。彼等若し我が名譽心よりして斯く行へりと公言せんには是れ彼等が自家撞着するものにして明かに己と戰ふ者たり蓋し彼等若し我を虛榮心に罪することなくんば此外果して他の如何なる言辭を憶出すべきかを知らざればなり。

第二、若し我に此の虛榮心ありしならんには我は逃ぐるよりも寧ろ受くること(選擧を)必要なりしならん。是れ何故ぞ。他なし此事は我に與ふるに至大の光榮を以てすべければなり。若年にして世俗

の虚を去りたること日猶浅き者が畢生斯かる事業に盡瘁したる人人より重んぜられ此等の人々よりも選擧の投票を多く受けて俄に衆目を驚かすが如きことあらば人々をして我を偉大なる者と思はしめ我を以て尊貴著名の者と爲さしむべければなり而も今は少數の者を除くの外教會の多數の人々は我名をも知らず我の辞したること(任命を)は恐らく衆人の知らざる所にして之を知るは若干少數の人のみならんも我が思考する所に依るに彼等とても皆悉く眞相に通ずるに非ず恐らくは彼等の中我は或は全く選擧せられずと爲し或は選擧の後不適任の者として斥けられたりと爲し自ら甘んじて逃れたるに非ずと思惟するもの多からん。

第三、ワシリイ。然れども眞相を知る者は驚かん金口。汝は彼等が我を虚榮傲慢に罪すといへり。何人より榮譽を期待すべきか。人民よりか。然れども人民は事の眞相を知らず。少數の人々よりか。然れども彼等とても亦我の事情に精通せず。抑汝が今此に來れるも彼等に對して辯解するの辭を得んが爲めなり。然れども今何の爲に此事を喋々すべけんや。人皆眞相に通ずれば我を傲慢若くは名譽心に罪せざらん姑く忍べ汝明に之を見ん。加之汝は斯かる大膽の意嚮を有する者ありで—我は之れあるを信ぜず—之を決行(神品職を受くること)する者のみならず他人に之れあるを疑ふ者も亦少からざる危險に遭遇することをも知らん。

第四。奉神禮は地に於て行はるゝも在天の儀式に依りて行はる而して此事や最も當然なり何となれば此儀式を制定したるは人間に非ず天使に非ず首天使に非ず其他造られたる或る能力に非ず撫恤者自らにして未だ肉體を脱せざる人々を立てゝ天使の務めの代表者

としたればなり。故に聖務執行者の潔白なること、恰も天に於て彼處の能力の間に立つが如くならざるべからず。附屬物(奉神禮の)は恩寵以前にも畏るべく且嚴かなりき例へば胸牌及び肩帶に於ける鈴、石榴、寶石の如き、頭帽、明衣、金板。至聖所の如き、堂内の肅々たる如き是なり(出埃及記二十八章)。然れども人荷も恩寵の奉事の性質を檢したらんには彼の畏るべく嚴かなる附屬物の取るに足らず(恩寵の奉事のそれに比して)乃ち法律を指して『舊光榮ありと爲しゝものは其分に於て已に光榮ありと爲さず後の光榮の更に愈れるに繰りてなり』(コリンフ後三の十)と云ふ言の至當と認めらるを知らん。汝が屠られて奠へられたるの主と此犧牲の前に立ちて祈るの司祭及び此の貴き血にて潑がるゝ衆人を見る時は汝は猶人々の間にありて地上に立つと思ひ直に天に移りて靈魂の肉慾的の思慮を悉く排除し皎々たる靈魂と潔き心とを以て天上のことを觀察せざるか。アゝ奇なる哉アゝ神の鴻慈なる哉。天に於て父と共に坐する者は此時衆人の手に抱かれ凡そ希望する者をして己に觸れ己を受くるを得せしむ。是れ皆信仰の目にて爲す所なり。此等の事たる汝豈之を見て蔑視すべきもの若くは之に對して己の高慢の意を表すべきものと爲すか。汝は他の奇跡よりして亦此神聖の優りたる所以を知らんと欲するか。須く己の目の前にイリヤと其周圍に立てる無數の人民と石の上にあるの献祭を想像せよ他の人々は皆靜肅にして沈默を守り預言者獨り祈禱するや火焔忽ち天より献祭に降る(列王記下十八の三十乃至三十八)此等の事たる頗る奇異にして人をして驚愕措く能はざらしむ。汝此れより今日行はるゝことに目を轉せよ汝は啻に奇異なるのみならず驚愕禁ずべか

らざるものあるを見ん。司祭前に立ちて火にあらで聖神を降し其の長時間の祈禱を爲すは火が上より降りて奠へたるものを焚かんことにあらで恩寵が献祭に下り之に由りて衆人の靈魂を熱し火にて鍛へられたる銀よりも皎々たるものと爲さんが爲めなり。全く狂亂若くは無智なる人の外誰か斯かる恐るべき機密を蔑視するを得ん。或は汝は若し神の恩寵の大なる佑助なくんば人間の靈魂が決して此献祭の火を忍ぶ能はずして皆全く滅亡すべきを知らざるか。

第五、凡そ猶肉と血とを着たるの人が幸福不死なる者の傍に與かるの如何に緊要なるかを悟得する者は聖神の恩寵が司祭に如何なる名譽を得せしめたるかを明知せん。此等の聖務及び其他我等の完全及び救贖の爲に緊要なること之に劣らざるもの亦彼等に依りて行はる。地に住みて猶此上に起臥する人々は天のものを左右すべき任務を托され神が天使にも首天使にも與へざるの權利を受けたり蓋し『凡そ爾等が地に縛る者は天にも縛られ爾等が地に釋く者は天にも釋かれん』(マトフェイ十八の十八)との言は彼等に言はれたればなり。此世の有權者は縛るの權利を有すれども肉體を縛るに過ぎず而も此の縛は靈魂其ものを縛りて天に達し司祭が地に於て行ふ所のもの神は天に於て之を完成し僕の意見は主宰之を確定す。是れ豈神が彼等に在天の悉くの權を與へたるを示すに非ずや(主)曰く『爾等人に其罪を釋さば則ち釋さる人に其罪を留めば則ち留めらる』(イオアン二十の二十三)と。此權利より大なる權利果して之れありや。『父は悉くの裁判を子に委ねたり』(イオアン五の二十二)而も我の見る所に依るに子は此の悉くの裁判を司祭に委ねたる如し。彼

等は權の高き程度に昇せられて恰も已に天に移り人性に超絶して我等の情慾より蟬脫したるものゝ如し。若し國王にして其臣下の或者に其の欲する者を獄に繫ぎ再び之を放免するの權利を與へたらんには此の如き臣民は衆人に榮とせられ名聲籍甚たらん而も此權に優ること猶天の地より優り靈魂の肉體より優るが如き權を神より受くることに就て或人々は區々たる名譽を受くる者にして此賜を受けたる者之を敬はざるも可なりと想像するを得るが如き思を爲す。斯かる無智は須く之を斥けん。實に我等が之に依らざれば救贖と約せられたる幸福とを受くること能はざる權利を敬はざるは無智の至りなればなり。人若し水及び神より生まれずば天國に入るを得ず(イオアン三の五)主の體を食はず其血を飲まざる者は永生を有たず(同上六の五十三)と云ふに此等のことを行ふ者は此の神聖の手即ち司祭の手にて行はるゝの外なしとせんには彼等の仲介に依らずして誰か地獄の火を避け若くは既に備へられたる榮冠を受くるを得んや。

第六、司祭は我等に取りて洗禮にて屬神的誕生と更生とを托せられたる人物なり我等は彼等に依りてハリストスを衣、神の子と共に葬られ此の幸福なる首の肢となる。故に我等は啻に彼等を有權者及び國王よりも深く畏るゝのみならず己の父よりも厚く敬はざるべからず此等は我等を血氣と情慾より生み(イオアン一の十三)たれども彼等は我等を神より生み幸福の更生、眞誠の自由及び恩寵的の子と爲すの原因なり。イウデヤの司祭は肉體を癩より清むること若くは更に確言せば清めずして唯清まりたる者を證明するの權利(利末記十四)を得たるに過ぎざるに當時司祭の位の如何に羨望的

なりしやは汝の知る所ならん。而も我等の(司祭)は曾に清淨を證明するのみならず肉體の癩にあらで靈魂の不淨を全く清むるの權利を得たり。故に彼等を敬はざるものは其罪ダファン及び其共謀者よりも遙に深く重罰を蒙るべき者なり何となれば彼等は己に屬せざるの權を窺窬せしも(民數記十六章)之に對する高尙の意見を有し頗る力を盡して之を求めたることにて其意を證せり然るに今日神品職が更に善く修飾せられ其程度此の如く高められたる時に當りて之を敬はざるは頗る暴慢の所爲と謂ふべし蓋し己に屬せざる名譽を求むると斯かる幸福を蔑視するとは同日の論に非ざればなり後者が前者より罪の重きこと輕蔑と尊敬の互に其趣を異にするが如し。斯かる至大の幸福を蔑視する不幸の靈魂果して之れありや。我は人苟も惡魔的狂暴に陷るに非ずんば一人たりとも此の如き者ありと想像すること能はざるなり。然れども再び本論の趣旨に歸らん神は司祭に與ふるに曾に所罰の爲めのみならず恩惠の爲め肉身の兩親に對するよりも更に大なる能力を以てし彼此れの互に相異なること猶現生の來生と相異なるが如し。甲は現生の爲に生み乙は來生の爲に生み彼は己の子を肉體の死より救ふ能はず其の襲ふ所の病よりすら防ぐこと能はざるに此れは或は寬大なる罰を用ゐ或は獨り敎誨勸告のみならず祈禱の助に依りて最初に陷罪より禦ぎ以て懊惱將に亡びんとするの靈魂を救ひたること往々之れあり。彼等は獨り我等を生む(洗禮にて)のみならず將來の罪よりをも釋すの權利を有す(聖書に)曰く『爾等の中に病む者あらば敎會の長老等を招くべし彼等主の名に依りて彼に油を傅けて彼の爲に祈禱すべし信に由る祈禱は病める者を救ひ主は彼を起さん若し彼罪を行

ひしならば赦されん』(イアコフ五の十四、十五)加之肉體の父は其子が貴顯有力の人々を侮辱するに當り毫も之に佑助を與ふること能はずと雖も司祭が信者を王侯ならで其の怒らしたる神と和睦せしめたること屢之れあり。是の如くなるに於て誰か敢て我を傲慢に罪するを得ん。之に反して我が說く所のものは聽者の心に深く感慨を起さしめ彼等は逃ぐる者を傲慢及び狂暴に罪せずして自ら進んで此位を得んと奔走する者を罪するに至るべしと思ふ。若し夫れ都市の長たる者が聰明有爲ならず都市を破壞に委して己自身をも亡ぼすとせんにはハリストスの新婦を飾るべる者罪を犯さゞらんとせば汝如何ばかり自己の力と上より遣はさるゝの力とを有せざるべからずと思ふか、

第七、何人もパワエルほど深くハリストスを愛したる者なく何人も彼より深く熱心を表したるものなく何人も彼より多くの恩寵を得たる者なしと雖も彼は斯かる特優の點あるに拘はらず猶戰々兢々として己の權力と己の部下の爲に恐る。『惟我恐る蛇が其狡猾を以てエワを誘ひし如く爾等の意思も壞はれてハリストスに由る樸實を失はんことを』又『我爾等と偕にせし時懼に居り多くの戰慄に居りたり』(コリンフ後十一の三、同前二の三)とは是れ第三の天に登り神の機密に參與し信仰したる後生きたるだけの死を忍び信者をして躓かさらしめんが爲めハリストスより賜はりたるの權力を利用するを欲せざりし者の言ふ所なり。彼神に命ぜられたる所より多くのことを行ひ萬事に於て己の益を求めず己の部下の利益を求めたる者にして此權の偉大なるを見常に斯かる恐怖の念を懷きたりとせんには我等屢己の利益を求め啻にハリストスの誡めたる所のこ

とを行はざるのみならず往々彼の誡を犯す者果して如何なる感をか爲さん。彼曰く『誰か弱りて我も弱らざらん、誰か躓きて我熱中せざらん』と(コリンフ後十一の二十九)司祭たる者方に此の如くならざるべからず若くは寧ろ此の如きに止まるべからず是れ我の言はんと欲する所に比して微々たるものなり。其言はんと欲する所とは何ぞ。彼曰く『我は我が兄弟、肉に依る我が親族の爲には自らハリストスより絶たれんことをも或は願ふなり』と(ロマ九の三)苟も此の如き言を發するを得靈魂の斯かる希望にまで達したる者にして避くる(神品職を)時は非難せらるゝも當然なるべしと雖も此德を缺ける我の如き者の非難せらるゝは避くる時に非ずして之を受くる時ならん。若し將軍の職に選擧するに際し此職を授くるの權を有する者銅匠若くは革工若くは其他之に類する職人を推擧して之に軍隊を委ねたらんには我は其の之を避けず己を將來の滅亡に陥れざらんが爲め百方謀を運らさゝる不幸の者を稱賛せざらん。若し唯牧者と稱し臨機應變此事業を行ふのみにて充分にして之に由り毫も危險なしとせんには欲する者我を虛榮に罪して可なりされど若し己に斯かる煩慮を受くる者大なる智慮を有し且智慮に先だち神の大なる恩寵、方正の品行、潔白の行、人間以上の德を具へざるべからずとせんには我が徒らに無益に滅亡するを欲せざるとて我を恕するを辭する勿れ。若し漕手を附し貴重品を滿載したる大船を發航せしむるに方り其舵を我に委ねエゲー海若くはティルレン海(共に航海に危險の場所)を通航すべきを命じたらんには我は其一言を聞くと共に逃走せん而して若し何故ぞと問ふ者あらば我船を覆さゞらんが爲めなりと答へん。若し損害金に止まり危險身体の死に止

まらば其先見遠慮の爲め何人も人々を罪せざらんも此にて難船に遭ふ者は此海に、溺るゝに非ずして火の淵に陷り靈魂を肉体と分つの死にあらで靈魂を肉体と共に永苦に投ずるの死に遭遇せんとす余が輕忽に斯かる災厄に己を投せざりしとて汝等何ぞ激怒忿懣するや。

第八、請ふ之を爲す勿れ是れ余の懇望哀願する所なり。我は我が靈魂の荏弱なるを知り此職務の重大なること此事業の至難なるを知る。司祭の靈魂を漂はす所の波瀾は海を動かすの暴風より起る所の怒濤より大なり。

第九、且夫れ第一虚榮は恰も恐るべき暗礁の如きものにして小説家の憶出したるシーレンの暗礁（希臘の古書に在り）より遙に危險なるものなり無難に此暗礁の傍を通航するを得たる者多しと雖も我に取りては此事至難にして今何等我を此淵に誘ふの必要なき時と雖も我は此危險より免るゝ能はず。我に此權を委ぬる者あらば是れ恰も我を後手に縛りて此暗礁に住むの怪獸に投じ彼等をして毎日嚙み裂かしむるに等し。此の怪獸とは果して何ぞ。忿怒、憂悶、嫉妬、憎惡、讒誣、誹毀、欺騙、僞善、狡計、無辜の人々に對して怒を發し奉職者の不幸を見て快とし彼等の幸福を見て悲み、賞讃を好み名譽に汲々とし（此事最も多く人間の靈魂を害するものなり）人氣に投して教誨し陋劣なる追從、卑屈なる諂媚を事とし貧者を輕蔑し富者に親切を盡し無智有害なるものを重んじ贈與者並に受くる者に取りて危險なる施濟を爲し獨り最も卑むべき奴隷に相當する恐怖を懷き勇氣缺乏して謙遜の嚴肅なる態度を執り乍ら謙遜の誠意なく曖昧なる譴責及び罰を加へ若くは更に之を確言せば卑しき者

に對しては非常に嚴にして有力者の前に對しては無言的なる事等是なり。此暗礁は此等若くは此等より更に多くの怪獸を接息せしめ一たび之に捕はれたる者は必ず奴隷的となりて婦人の歡を得んが爲め言ふも耻つべきことを多く行ふに至る。神の法は婦人を此職務より斥けたるに彼等は之に侵入せんとす然れども自ら權利を有せざるが故他人を經て凡ての事を行ひ己の意の儘に司祭を選擧及び排斥する如き勢力を占め『底を上にす』との諺實地に應驗するに至れり。服從者は首長を御す而も其者男子なれば猶可なるも敎ふることをも許されざる者(ティモフェイ前二の十二)なり福たるパウルが敎會に於て言ふことをすら禁じたる所のもの(コリンフ前十四の三十四)敎ふるとは何事ぞ。我は或人より彼等の暴慢甚しく敎會の司長に譴責を加へ彼等を遇すること主人の其僕に對するよりも酷なるが如き事を行ふに至れりと聞く。

第十、何人たりとも余の非難が悉くの人々に關すと思ふべからず此等の網を逃れたる者(司祭)多くありて其數捕はれたる者より遙に多し。我は神品職其ものを此災に罪せず我は斯かる無智にまで達することを欲せず。兇殺の爲に劒を罪せず酩酊の爲に酒を罪せず侮辱の爲に腕力を罪せず無分別なる狂暴の爲に勇氣を罪せず智慮ある人々は皆神の賜を惡用したる者を非難處罰す是の如く神品職も亦不正に之を處理するの我等を非難するこそ當然なれ。彼(神品職)は我の枚擧したる惡の原因にあらず我等自ら無分別にして預め己の靈魂を識らず此事業の困難なるを見ずして好んで申込に應じ實地に着手するに及び無經驗にて自ら闇中にあり其の托せられたる人民に多くの害を加ふる人々に之を委ねて及ぶ限り我等自ら之を

汚すものなり。神若し己の教會を守り我が靈魂を惜みて速に此危險より我を救はざりせば此事殆ど我に遭遇せんとしたり。汝の見る所に依れば斯かる紛擾の教會に起りたるは抑何故ぞ請ふ我に告げよ。余の思惟する所に依るに此事たる司長の選擧任命が無差別にして偶然行はるゝに外ならざるべしと思ふ。首は身體の他の部分より發する有害の蒸發氣を適當の狀態に配置せんとせば强健ならざるべからず而も首は自ら弱くして病的影響を排すること能はずんば自らも更に衰弱して己と共に全身體を亡ぼさん。今又此の如き事の起らざらんが爲め神は我をして當初より我の占め得たる教會の體の足の狀態に止らしめたり。以上言ふ所の外ワシリイよ他に猶司祭の有すべくして我の有せざるもの多々あり首として彼の靈魂は全く此事業を慕ふの念なきものたらざるべからず、彼若し之に對し野心勃々たるものあらば其の職に就きたる後其野心更に熾に燃起るべく又若し强迫的に就職せしめられたらんには其職を維持せんが爲め諂ひ又は不正不當の事を寬恕し又は多く金錢を費消すべき時に當りて多くの災難を招くに至らん。或者が此權を得んとして教會に殺傷を行ひ市中に擾亂を釀したることに就ては人をして我無根の事を云ふと思はざらしめんが爲め余は今之を默默に付せん。余の意見に依るに此事に對するには此權の重きを避け之を受くるに及んでは他より非難を受けず若し位を斥けらるべき罪を行ふことあらば自ら先んじて此權より辭退すべきほど謹慎の念を以てせざるべからず。此の如くせば或は神より寬恕を蒙るを得べきも體面を顧みずして飽くまで此位を保たんとするに於ては寬恕の道を失ひ一の罪に加ふるに他の更に重き罪を以てして益

神の怒を激せん。

第十一、然れども何人たりとも敢て此事を行はざらん何となれば此權を求むることは實際災難なればなり。余の之を言ふは禍たるパウェルの言に矛盾するに非ず全く其言に適ふものなり。彼何と言ふか。『人若し監督の職を得んと欲せば善き事を望むなり』(ティモフェイ前三の一)と。余が災難と稱したるは神品職其者を希望することに非ずして長たる事と權勢を得んとすることの希望なり。此希望は余の意見に依るに充分靈魂より逐斥すべく且最初に之をして靈魂を占領して自由に之を御することを許すべからず。此權を以て自負することを望まざる者は之を失ふことをも恐れず之を恐れざる以上は悉く「ハリスティアニン」に相當する自由を以て行ふを得るも之に反して除黜を危ぶみ之を恐るゝ者は多くの災難に伴ふの憐むべき奴隷の狀態を忍び屢人々と神とを侮辱するに至るを免れず靈魂の意嚮や此の如くなるべからず乃ち我等が戰爭に於て勇武なる軍人の勇戰奮鬪して勇ましく戰死するを見るが如く此職に就く者も此權より除黜せらるゝことは權其者よりも少からざる榮冠たることを知るの「ハリスティアニン」に相當するが如くにして聖務を行ひ又除黜をも甘受せざるべからず。毫も不正當のこと及び此位に反することを行はずして除黜せらるゝ者あらば不當にして之を黜けたる者に罰を備へ己に大なる賞を備ふるものなり(主)曰く『人我の爲に爾等を詬り窘逐し爾等の事を僞りて諸の惡しき言を言はん時は爾等福なり喜び樂めよ天には爾等の賞多ければなり』(マトフェイ五の十一、十二)と。是れ同僚の爲め或は嫉妬に由り或は他人の歡心を買ふに由り或は憎惡に由り或は其他不正の原因に由りて黜

けられたる時にあるものにして凡そ敵より之を蒙る者ある時は余の思ふ所に依るに彼等が己の惰惡に由りて其人に如何なる利益を備ふるかを證するにも及ばざるべし。されば偏く意を注ぎ深く觀察して斯かる希望の片煙の何くにか掩匿しあらざるかを探らざるべからず。最初より此慾に染まずして權を得たる後之を避くるを得る者は福なり。若し此名譽に達するに先だち己に此の恐るべき猛獸を養ふ者あらばその權を得るに及んで如何なる爐に己を投ずるやは形容し得ざる所なり。我にも亦此希望強くあり(我は謙遜よりして汝に詐僞の事を言ふと思ふなかれ)たるも他の悉くものよりも最も我をして恐怖せしめて逃ぐるに至らしめたり。戀愛に惱む者がその愛する者の側に在る間は情慾の非常なる苦痛を感ずるも成るべく遠く其の愛する所の者より遠ざかる時は其の狂熱の鎮靜するが如く此權を熱望する者も之に近づく時は忍ぶべからざるの苦痛を感ずるも之を受くるの信頼を失ふ時は信頼と共に希望も消失す。

第十二、此の一原因にても重大なり此原因若し惟一のものたらんには我をして此位より避けしむるに充分なるべきも今他の之に劣らざるもの之に加はれり。何ぞや。他なし司祭は儆醒して深く注意し己の爲めのみならず多くの人々の爲に住する者として四方に目を注かざるべからず(ティモフェイ前三の二)然るに余は怠慢にして弱く辛うじて己の救贖のことを慮るを得ることは假令汝が我を愛するよりして我が弱點を掩蔽せんとするも汝の自ら首肯する所ならん。此にては齋戒のことをも夜間の警醒のことをも地に臥することをも其他の身體を疲らすことをも言ふ勿れ我が此事に於ても

未だ不完全なることは汝の知る所なり。假令我は嚴格に之を行ひ得たりとするも我の目下の劣弱にては司長たる事に於て我に何等の利益をも來たすこと能はざらん。是れ夫の修道室に閉ち籠りて獨り己の事のみを慮る者に取りては利すること最も多かるべしと雖も多くの民に分たれて部下の各人のことを特別に焦慮すべき者は其人若し堅固にして甚だ剛毅なる精神を有せざるに於ては彼等の進歩の爲め果して如何なる利益をか來すべきものぞ。

第十三、我は品行の嚴正と共に更に精神の剛毅の經驗を要すとするも怪む勿れ。飲食物及び柔かなる臥床を輕んずることは我等の見るが如く困難ならざるものにして就中粗暴にして幼少より斯かる教養を受けたる者幷に他の體格及び習慣が斯かる苦行の粗暴を柔ぐる者に取りて然りとす然れども部下の者より侮辱讒誣中傷非故意的及び故意的の嘲笑を忍び受け首長及び部下より無益徒然の譴責を忍び受くることは多くの人々の能くせざる所にして一二人のみ斯かる苦行に堅固なる人々が此の不快の事にて心を亂すの甚しきことは猛獸よりも猛烈となるを見て之を知るに足らん。此の如き人々は殊更之を神品の住所より遠ざけざるべからず。若し司長たる者が飢餓を以て己の身を疲らさず跳足にて歩まざるに於ては此事たる毫も教會の社會に害を及ぼさゞるも猛烈なる忿怒は此慾に溺れたる者と隣とに大なる不幸を來たす。前者のことを遵守せざる者は神之を罰せざるも徒らに怒る者は地獄及び地獄の火を以て之を罰す(マトフェイ五の二十二)虚榮心滿々たる人が人民を御するの權力を得て(此慾の)火に益々多く食を與ふる如く閑靜の生活を爲して少數の人々と交際する者が多くの人民を統御するの權を受

くるに及んでは恰も四方より衆人に傷つけらるゝ獣の如く怒を抑ゆる能はず忽ち忿激して自ら決して冷静なる能はず己に托せられたる人々を無數の災厄に服せしむ。

第十四、放縱猛烈なる怒ほど靈魂の潔白と意志の明亮を昧ますものあらじ。

睿智者曰く忿怒は智者をも害すと(箴言十五の一)此れにて靈魂の目を昧まされたる者は恰も夜戰に於ける如く味方を敵と正直の者を不正直の者と分つ能はず玉石混淆假令害を蒙らんとするが如き恐あるも自ら快を取らんとして直に萬事を決行するに至る蓋し激怒の炎々たるものは一種の快を含むものにして靈魂の健全の狀態を悉く壞傷して他の快樂よりも強く靈魂を占領するに至るなり。此激怒は驕傲不當の憎惡無分別の怨恨を生じ屢無分別に且理由なく侮辱を加へしめ其他多く之に類することを言ひ且行はしむ是れ靈魂は情慾の激烈なる壓迫に動かされて其刺激に抵抗する力を奮起する能はざるに依るなり。

ワシリイ曰く然れども汝の伴るは我の最早や忍ぶ能はざる所なり汝の此病より如何に遠きかは何人か知らざらん

金口。我曰く尊貴の者よ汝は何ぞ我を篝火の傍に立て安眠せる獣を激せんと欲するか。汝或は我が意旨の力を以てせず安穩を愛するの念を以て此慾を抑制したるを知らざるか。斯かる意氣ある者は閑居するか又は一二人の友と交はるのみにして多くの事務に忙殺せられざるに於て始めて此の炎々たる焔を避くるを得べし。然らざるに於ては彼は己自身のみならず他の多くの者をも己と共に滅亡の淵に陷れ益節制を守ることを慮らざる者と爲さん。部下の人民は多くは己の首長の擧動を以て模範と爲し之に倣ふが如く見倣

すに慣れたり。自ら高慢する者は焉んぞ他人の高慢を制するを得ん。人民の中誰か首長の激怒する狀態を見て温柔と爲るを望む者あらん。司祭たる者は己の缺點を掩蔽すべからず其中微々たる者も忽ち著名の者と爲る。戰士は家に居りて何人とも戰はざる間は假令甚だ弱き者たるにせよ隱くるゝを得ると雖も戰場に臨んでは忽ち判知せらる。私的無動作の生活を爲す人々も亦猶此の如く閑居を以て己の罪を秘すと雖も人前に出ださるるに於ては己より閑居を脱すること恰も衣を脱くが如く外部の擧動を以て衆人に己の靈魂を暴露せざるを得ざるに至る。彼等の善行は多くの人をして競ひ倣ふの心を起さしめて益を爲すが如く彼等の過失も人をして善行を慮らざる者たらしめて稱賛すべき動作を避くるの心を起すに至らしむ。故に司祭の靈魂は四面玲瓏美を以て輝き之を仰ぎ見るの靈魂を喜ばしめ之を照すを得るが如くせざるべからず。區々たる人々の罪は恰も闇中に於て行はるゝが如くにして獨り犯罪者を亡ぼすに止まるも多くの人に其名を知られたる偉人の罪は墮落者をして益〻善功を立つるを慮るの念を薄からしめ自省する人を傲慢ならしめて衆人に一般の害を及ぼすものたり。加之俗人の過失は假令暴露したりとて何人にも甚しき災を及ぼさゞるも神品の位の高所に立つ者の(過失)は第一衆人の見る所たると次に彼等は假令微々たる失錯を行ふも他人に大失錯と見做さる何となれば人々は罪を測るに事件の重大如何を以てせず犯罪者の位を以てすれば なり。故に司祭たる者は恰も金剛石の武器を以てするが如く緻密なる注意と常に己の品行の上に警醒を加ふるを以て四方より己を防ぎ遍く監視して人に其の開放して守備なき所を發見せられ致死

の打擊を受けざる如くすべし蓋し獨り敵及び反對者のみならず伴りて友人の體裁を裝ふ者に至るまで周圍の人々皆彼を傷つけ且擊たんとすればなり。されば(神品職の爲には)神の恩寵に依りて昔ワビ、ロンの火爐に於て聖なる神童の身體の表したるが如き靈魂選ばるゝを要す(ダニイル三の二十二至四十六)此に火の材料と爲るものは乾枝や脂や亞麻に非ずして更に危險のものなり何となれば此にては火も亦物質的に非ずして嫉妬の炎々たる焔は司祭を圍繞し四方より騰りて彼等を襲ひ彼の時火が童子の體を貫きたるよりも更に烈しく彼等の品行を貫徹すればなり。此焔にして若し微々たる藁の跡にても發見したらんには忽ち之に着き其の朽ちたる部分を焚きその他の部分は假令日光より皎々たるも之を焚きて煙にて黑くす。司祭の品行苟も諸般の關係に於て善く整ふ以上は讒謗の乘ずる所と爲らずと雖も人間の通例とし且現生の擾々たる海を渡る者として何事をか微々たる事を見落す時は彼の其他の善行は彼の爲め毫も非難者の口を塞ぐこと能はずして此小過夫は他の一切のものに汚點を付するに至る。人皆彼を評するに肉體を纏ひ人性を有する者の如くせず如何なる弱點にも與からざる天使の如き者と爲す。夫の暴君の權力を握る間は皆彼を畏れて之に諂ふ是れ其の之を黜くること能はざるが故なり然れども彼の形勢一變するを見るに及べば伴りの諂媚を一擲し昨日までの友人は忽ち敵と爲り彼の悉くの弱點を看破して其權を奪はんと努むる如く司祭に對しても亦然り曾て彼の勢力を有せし時に彼を尊び其歡心を得るに汲々たりし者微々たる機會に乘じて烈しく彼に敵對し彼を獨り暴君たるのみならず更に惡しき人として之を斥けんとす。暴君は己の侍

衛兵を恐るゝ如く司祭も己の親近の者及び同役者を恐るゝこと衆人を恐るゝよりも甚し何となれば彼の權利を窺窺し最も能く彼の行を知ること彼等に若く者あらざればなり彼等は司祭の身邊にありて他人に先だちて彼に遭遇したることを知り己の讒言にすら信用を措かしめ針少棒大に吹聽して讒せられたる者を害するを得べし然る時は使徒の言反對の意味に應驗す曰く『若し一の肢苦まば悉くの肢は之と共に苦み若し一の肢榮を得ば悉くの肢は之と共に喜ぶ』(コリンフ前十二の二十六)是れ豈大なる敬虔を得たる者に非ざれば悉く此等の事に堪へ得ざるべきに非ずや。汝豈此の如き苦戰に我を遣はさんとするか。汝豈我の靈魂が斯かる種々異樣の戰爭に堪へ得べしとするか。汝は如何にして且何人より之を知りたるか若し神之を啓示したらんには彼の命を示せ我乃ち聽從せん若し之を爲す能はず世間の噂に依りて宣告するものならば請ふ欺くことを止めよ。我等の境遇に關しては他人よりも我等自身最も深く信用すべきものなり何となれば人の事は人の內に居る神の外人誰か之を知らん(コリンフ前二の十一)若し前にあらずとも今此言にて我此權を受くるに於ては己自身と選擧人とを世の嗤笑と爲し大害を釀して今日余の占むる狀態に復婦するに至るべきこと汝能く了解したるならんと思ふ。啻に嫉妬のみならず嫉妬よりも更に烈しきもの即ち此權を希望するの念は常に多くの人をして之を有する者に反抗せしむ。利慾深き子が其兩親の老衰を苦にする如く此人々の中にも何人かの神品職が久しく繼續するを見此の如き司祭を殺すを以て悖理の事なりとして速に其權を奪ひ己代りて其位置を占め各其權の己に歸せんことを期待す。

第十五、余は幾千倍危險極まれる此戰爭の他の種類をも汝に示さんか。汝往て彼の屢教會の職に對する選擧の行はるゝ人民の祝祭を見よ然らば汝は部下の數の多きがごとく司祭に對する非難の甚だ多きを見ん。凡そ此名譽を推薦するの權利を有する者は皆多くの部分に分れ司祭等の會合に於ては彼等自身の間にも主教との間にも一致協同を見ることなく各自ら己の說を主張して彼此其選擧を異にす。之が原因は人皆其の首として目を注くべき所のもの即ち靈魂の德に目を注かずして此名譽を推薦する他の動機あるに依るなり例へば甲は曰く某は門閥家なるを以て選擧せざるべからずと乙は曰く某は富裕にして教會の收入にて給養するの要なきが故に須く選擧すべしと丙は曰く某は反對派より隨意我等に轉宗したるが故選擧せざるべからずと斯くて甲は己の友人を他に優れりとし

乙は親戚の者を推薦し又諂媚者をすら推薦する者あるも何人も其適材如何を見るを欲せず聊かなりとも靈魂の性質を知るを欲せず余は前記の原因を以て司祭の資格の充分の證據と見做さず且此權の爲め緊要なる敬虔にて大に秀てざるべからざることすら余の問ふ所に非ずと雖も其人若し敬虔と共に大なる智慮を有する者に非ずんば我は直に選擧することを敢てせざるべし。隱遁に生涯を送りて齋戒にて其身を疲らしたる者の中余の知る所の者多し彼等が閑居して獨り己のことのみを慮りたる時には神の悅ぶ所と爲りて日々此智德に進歩したれども人民に現れて人々の恐蒙を啓發すべき時に當りては彼等の或者は最初より此の如き事業に不適任の者たること明かと爲り他の者は已むを得ずして勤務を繼續したるも從來の嚴正なる品行を一變して己自身に大害を及ぼし他人に何等

の利益をも來さゞりき。假令生涯下級の職務に止まりて老年に達したりとするも我は其人を單に其年齢を敬ふの一事のみに依りて之を進級せしめざるべし。彼若し斯かる年齢に於ても無能たるに於ては如何なるべきか。余の今之を言ふは白髮を侮辱し若くは修道者に屬する者を全く此職より除くべき規定を設けんと欲するが爲に非ず―蓋し彼等の中にも此職にて名を赫したる者多し―乃ち敬虔其者も老衰も之を領する者をして神品職に堪ふる者と爲す能はずとせんには前記の原因の如き固より之に堪ふる者と爲す能はざることを證せんと努むるのみ。又他の更に無分別なる理由を提唱する者あり例へば或者の如き反對者の方に轉ずるの恐あるが爲め教衆の班に選ばれ又或者はその僧惡を忘れて多く惡を行はざらんが爲め選ばる。不適任にして多くの惡癖に充滿したる人々が其の罰せらるべき事の爲に名譽を受け教會の闘を跨ぐことを許されざるべき事の爲め神品の位に昇せらるゝよりも他に不法無道の甚だしきものあるか。邪にして毫も其位に堪へざる人々をして斯く神聖にして畏るべき事業を滅さしむるに於て我等猶他に神の怒の原因を求むべきか請ふ我に告げよ。事務の管理が或は之が任に適せざる人々或は勢力の大に卓越する人々に託せらるゝ時は教會は毫も「エウリプ」(日夜七回完水の增減すと云へる希臘の一小海峽)と異らざるものと爲るなり余は曾て世の有司が賞を頒つに當り精神的の德に意を注かずして富と老邁と人々の保護とに意を注くを見て冷笑したりしが斯かる愚昧が我等の事業にも入りたりと聞くに及んでは余は既に之を奇怪の事と見做さゝらん。人民より光榮を求め萬事金錢の爲に行ふ所の世俗の人々が此の如くにして罪を行ふも自ら世塵を脫したり

と揚言する人々の行ふ所毫も彼等に優らず天の事を論議すること恰も地面の坪數又は他の之に類することを議するが如くして取るに足らざる人々を採用し之を夫の神の獨生子が己の光榮を卑むることを辭せず人と爲りて僕の形を受け唾の汚辱と頰の打擲とを甘受し肉體に依り汚辱極まるの死にて死したるを以て成就したる事業(ヒリッピ二の七、マトフェイ二十六の六十七)の上に立つる時に及んでは亦何ぞ怪むに足らんや。且彼等は此一事に止まらず更に他の無分別の事を加ふ即ち啻に不適任の者を撰擧するのみならず適任者を排斥す。是れ恰も双方より教會の堅城を毀つを要とするが如く或は神の怒を燃起するに一原因のみにては不足なりとして更に他の輕からざるものを以て之に加ふるもの丶如し。余の意見に依るに有益の人々を斥け無益の人々を採用するは等しく罪なることにしてハリストスの群をして何事に於ても慰籍安樂を得せしめざらんが爲に行ふものなり。是れ豈我等の受けんとするものよりも更に恐るべき幾千の電及び地獄に相當する所爲に非ずや。然れども『惡人の死ぬるを悅ばず惡人の其途を離れて生くるを悅ぶ』(イエゼキイリ三十三の十一)者は此の如き惡事を寛容す。誰か彼の仁慈に驚かざらん。誰か彼の慈憐を異とせざらん。「ハリスティアニン」は敵よりも多くハリストスに屬するものを亡ぼすに彼鴻慈者は猶慈憐を垂れて悔改に招ぐ。主よ爾に光榮を歸す爾に光榮を歸す爾の仁慈何ぞ夫れ限りなく深きや。爾の恒忍何ぞ夫れ豐かなるや爾の名にて平凡卑賤の者より化して尊貴有名と爲りたる者は此名譽を化して彼等を尊貴にしたる者に對して反抗する具と爲し大膽にも近づくべからざる者に手を觸れ神聖を汚辱し有德なる者を排

斥し以て人物の缺乏するに際し惡人をして極めて自由に其意の儘に萬事を破壞せしめんとす。汝若し此惡の原因をも知らんと欲せば彼等が前のものと同じきを見ん何となれば彼等の根底所謂母なるものは同一にして即ち嫉妬なればなり然れども彼等は同一の形を有せずして互に其狀を異にす。甲は若年なるを以て斥けざるべからずと云ひ乙は諂ふことを知らざるが爲めなりと云ひ丙は某と爭ひたるが爲めなりと云ひ丁は某が其の推薦したる所の者排斥せられて他の者の選ばれたるを見て侮辱せられたりと爲さゞらんが爲めなりと云ひ戊は善良温厚なるが爲めなりと云ひ已は犯罪者を罰すること餘りに嚴なるが爲めなりと云ひ庚は他の之に類する原因に依ると云ふ。要するに其の欲するだけの口實を擧ぐるに躊躇せず若し毫も他の口實を見出さゞれば富をも口實とし又俄に此名譽に登庸せず漸次を以て登庸せざるべからずと云ひ其他凡そ欲する所の原因を求むるを得。余は今問はんと欲するものあり主敎たる者が斯かる暴風と戰ふに際して如何なる事を爲さゞるべからざるか主敎は如何にして斯かる怒濤に對立すべきか。主敎は如何にして此等の攻擊を排すべきか。彼若し健全の考慮を以て處分したらんには彼にも被選者にも人皆敵と爲りて事毎に彼に反抗して行ひ毎日爭論を生じ無數の嘲笑を以て選ばれたる者を窘逐し之を斥け若くは自派の者を登庸せざれば止まず。而して此狀恰も船長が航行する船内に海賊を同船せしめ之をして己にも漕手にも乘船客にも時々刻々常に害を加へしむるが如くならん。若し主敎にして此の如き人々の歡を得ることを以て自己の救贖に優れりと爲し採用すべからざる者を採用したらんには彼等の代りに神を以て己の

敵と爲さん豈之れより恐るべき者あらんや。且主教の彼等に對する狀態は前よりも一層困難と爲らん何となれば彼等は皆互に相助けて益勢力を增長すべければなり。從來靜かなる海も烈しき逆風を受くるに由りて俄に荒れて怒濤を揚げ航海者を滅すが如く教會の靜謐も有害なる人々を採用するに及んでは擾亂して多くの覆沒を見るに至らん。

第十六、此の如き暴風を凌ぎ一般の幸福に對する斯かる妨礙を排せんとする者は如何の人物たらざるべからざるや請ふ之を一考せよ。此の如き人が有らゆる妨碍に對立せんとせば端正にして傲慢ならざる者、嚴酷にして寬大なる者、權勢ありて交際好きの者、公平無私にして親切なる者、謙遜にして卑屈ならざる者、嚴正にして溫厚の者たらざるべからず適任の人物は假令人皆反抗するも充分の權を以て之を採用し不適任の者は人皆之を辨護するも同じく充分の權を以て之を排斥し只管教會の幸福のみを旨とし人に對する憎惡若くは歡心を以てすべからず。されば我が此職を辭したることの徒然ならざるは汝に取りて明かなるか。されど我は未だ悉く汝に說明したるに非ず他に猶我の言ふを得べきことあり而して汝は汝の譴責する事の爲め汝の前に辯護せんと欲する親友の言を聞くを煩はしとする勿れ此事たる啻に汝が我を他人の前に辯護するが爲め汝に取りて利益なるのみならず恐らくは此事を處分するに就て少からざる益を來たさん。凡そ此の生活の途に入らんと欲する者は預め能く此務に關することを調査し而して之に着手すること必要なり。是れ何故ぞ。他なし能く之を知るに於ては新事物の起る時に於て少くとも周章狼狽せざるべければなり。汝は我が寡

婦を憐むこと或は童貞女を慮ること或は訴訟事件の難事より說き始めんことを欲するか。此等の事たる各種々の煩慮の相伴ふものにして煩慮よりも恐怖の伴ふこと多し。首として他の事件よりも最も容易の事と見ゆる寡婦眷顧の事より始めんに此眷顧は金錢の支出に止まる(ティモフェイ五の十六)が如くなるも其實然らず徒らに無分別にして彼等を名簿に編入したることは多くの災を釀したるを以て彼等を採用するに當りても愼重の調査を爲さゞるべからず。彼等は家庭を亂し緣を絕ち屢窃盜不節制及び其他之に類する舉動に訴へられたり。敎會の費用を以て此の如き寡婦を養ふは神より罰を招ぎ人々より非常の非難を受くるものにして慈善家をして慈善心を起すの念を薄からしむ。誰かハリストスの爲に献ずることを遺言されたる財產を以てハリストスの名を詐る者の爲に消費することの決心を爲す者あらんや。故に斯かる寡婦のみならず自活するを得るの寡婦をして極貧の者に供すべき晩餐を空費せざらしめんことに愼重嚴重の注意を加へざるべからず。此の調査に次ぎて慮るべきは食糧が彼等の爲に豐かに注かるゝこと恰も泉より出つるが如く且決して盡くることなからんこと是なり。自ら貧に甘んせざる者は饜ることなく催促繁く忘恩なるに依りて惡し。彼等の非難に對する有らゆる口實を利用する口を箝するには多くの智慮と多くの盡力とを要す。人民は苟も富に戀々たらざる者を見れば直に其人を以て此事業を處分するの能力ある者と宣言す。此雅量なくんば其人保護者たるよりも寧ろ破壞者と爲り牧者たるよりも狼たるべきを以て雅量は首として必要のものなれども余の見る所にては此雅量のみにては不充分にして之と共に他の性質も

必要なり、是れ他なし衆人に取りて諸幸福の因たる忍耐是なり此忍耐なるものは靈魂を導きて恰も穩かなる良港に入るゝものゝ如し。寡婦は己の貧困なるに依りても年齢に依りても女性たるに顧みても穩かならざる横暴の事を爲し時ならずに絶叫し徒らに非難し感謝すべき事の爲に怨み稱賛すべき事の爲に誹毀す。司長たる者は毅然として此等の事を忍び時ならざる要求に對しても將た不當なる譴責に對しても激怒すべからず。女性なる者は其の不幸に際するに於ては宜しく寛恕すべくして侮辱すべからず彼等の不幸を憐まず貧困の悲に加ふるに更に侮辱の悲を以てするは極めて殘酷の事なればなり。故に一睿智者は人間の本性の貪利なると傲慢なるとを看破し併せて貧の性質たる最も優美なる靈魂をも卑屈ならしめ屢恬然として同一の哀願を反覆するに至らしむるを知り貧者の哀願に對して怒らず彼等の絶えざる要求に對して激するが爲め補助者と爲るの代りに迫害者と爲らざらんことを訓誨せんとして貧者に對し寛容にして能く之に接すべきを勸む曰く爾の耳を悲むことなくして貧者に傾け優しく柔和にして之に答へよ(シラフ四の八)と。彼は激怒する人を棄てゝ(蓋し病者に向ひて何をか言ふを得ん)貧者の弱點を忍ぶを得べき人に向ひ施濟を與ふるに先だちて柔和なる目と優しき言を以て之を勵ますべきを勸む。假令寡婦の所有たるべきものを横奪せずとも之に多く譴責を浴せかけ之を侮辱し彼等に對して激怒する者は是れ施濟を以て彼等の貧困に依る憂悲を慰めざるのみならず罵詈の言を以て更に其心痛を增すものなり。彼等は假令口腹の需に依り已むを得す耻を忘るに至ると雖も此の已むを得ざる事の爲め憂悲するものなり。彼等は是の如

く飢餓に迫るの已むを得ざるよりして哀願し哀願に於て廉耻を顧みざるに至る而してその破廉耻の爲め彼等再び憂愁に遭ふものとせば種々の暗澹たる煩悶の勢力彼等の靈魂を襲ふものなり。彼等のことを慮る者は須く寛厚にして譴責を以て彼等の憂愁を增さゞるのみならず成るべく彼等の心情を慰めざるべからず。侮辱を受けたる者は其豐富なるに依り侮辱を受けたる故に由りて富の益を感せざる如く優しき言を聞き其慰籍を以て施濟を受くる者は益欣喜悅樂して其の惠みたる物は斯かる施濟の方法に由りて二倍と爲るものなり。我は己に由りて之を言ふに非ず前にも訓諭を與へたる者の言に由りて言ふなり。彼曰く我が子よ施を行ふ時譴責を爲す勿れ凡そ惠みを行ふ時言にて侮辱する勿れ。露は暑熱を冷かにするに非ずや。此の如く言は施濟に優る。されば言は善き惠みより高尙なるに非ずや。而も慈善の人には彼此共にありしと(シラフ十八の十五乃至十七)彼等を慮る者は啻に溫良柔和の人たるのみならず節儉の人たらざるべからず然らざれば貧者の財產は等しく損失を招かん。曾て或人此職を奉じ多くの金錢を集め乍ら己の爲に之を費消せざりしと雖も少許の外貧者にも頒たずして多くの部分を地に埋め之を保存して國難に際し此財產を擧げて敵の手に渡すに至れり。故に敎會の財產を非常に增加せず又之を乏しからしめず其の收集したる所のものは悉く之を貧者に頒ち人民の隨意の獻金より敎會の財寶を集めんが爲には深き注意を要す。旅人を接待し病者を愈すが爲にも汝は如何ほどの費用と之を慮る者の如何ほどの盡力及び智慮を要すと思ふか。之が爲にも前記のものより決して少からざる費用を要し且往々更に多き費用を要することあり

而して之を慮る者は温柔と智慮とを以て資財を集め富者をして好んで惜氣なく献金を爲さしめ献金者をして貧困者を眷顧せんことを慮りて其心を憂悲せしめざるが如くせざるべからず。病者たる者は激怒し易く且安閑たるを以て最も多く盡力熱心を表することを必要なり。若し萬事に於て深き考慮と懸念を加へず聊かの手緩りにてもありたらんには病者に大害を加ふるに至らん。

第十七、童貞女を慮るに就ては此寶の貴くして此團體他のものよりも高尚なるに依り恐るゝ所最も深し何となれば此聖人の中にも多くの罪惡に充滿したる者侵入して大なる禍を生じたればなり。自主の處女が罪を犯すと其婢の罪を犯すとは同日の論に非ざるが如く(此關係に於て)童貞女を寡婦と比すべからず。閑談爭論し媚び諂ひ班を忘れ到る處に臨み市中を往來することは寡婦に取りて問ふ所に非ずと雖も童貞女に至りては自ら高尚の功を立て高尚の智德を修むる決心を爲し地に在りて天使的の生活を爲し此肉身を以て無形體の能力に倣はんことを約す。童貞女たる者は故なく屢家を離れ無益の空談を爲すべからず誹毀追從の如きは其名をも知るべからざるものたり。故に彼は嚴重なる保護と大なる補助を要す。神聖の敵は絶えず最も強く童貞女を襲ひ百方狡計を運らして其の弱りて倒るゝ者を呑まんとす多くの奸惡なる人々も亦此の如く(彼に對して)人性の有らゆる狂暴を逞うす要するに彼は外より襲ふの敵と内より攻むるの敵と二倍の戰を爲さゞるべからず。故に彼を慮る者は多く恐怖の念を懷くべく若し望ましからざることに遭遇したらんには更に多〻の危險と憂愁を忍ばざるべからず願はくは之れなからんことを女は父に取りて絶えざる秘密の慮にして之を

懸念するより安眠するを得ず』(シラフ四十二の九)若し父たる者其女が懷妊せず若くは妙齡を過さず若くは夫に嫌はれざらんが爲め斯く戰々兢々たりとせんには此事にあらで更に他の緊要なる事を慮る者の心情果して如何なるべき。此に於て嫌はるゝ者は夫に非ずしてハリストス其者なり非妊は曾に侮蔑せらるゝのみならず靈魂の滅亡と爲るなり(主)曰く『凡そ善き果を結ばざる樹は斫られて火に投げられん』と(ルカ三の九)新郎に嫌はれたる者は離緣狀を取りて離別するのみにて足らず彼の激怒の爲め永苦にて罰せらる。肉體の父は己の女を保護するが爲には便宜多く母と云ひ敎育者と云ひ多くの侍婢と云ひ住所の安全と云ひ皆兩親の其女を保護するの援助と爲るものなり。父たる者は其女をして屢外出せしめず其女外出することあるも逢迎ふ者に會見するの必要なく黄昏の暗黑も會見するを欲せざる者を隱すこと家の壁に劣らず。加之何等の原因たりとも彼をして男子の目前に出るの已むを得ざるに至らしむるものなく家の需要の焦慮も侮辱者の迫害も其他之に類する何等の事たりとも彼をして斯かる會見の必要を感せしめず此等の事は皆その父之を慮るが故なり。彼は唯自ら彼に相當する柔和に不適當なることを行はず言はざらんことを慮れば可なるのみ。而も此にては親切なる監督者をして童貞女を監督することを困難ならしめ殆と不可能ならしむるもの多し此の如き人は其女を己の家に居らしむる能はず何となれば斯かる同居は不都合にして且危險なきに非ざればなり。假令此同居よりして何等の害を來たさず彼等は常に神聖を不可侵に守りたりとするも靈魂を誘惑に陷れたる爲め彼等自ら互に罪を犯したらんよりも少からざる應答を爲さゝるべから

す。同居は不可能なるを以て靈魂の動作を監視し其の放恣なる擧動を牽制し正當順理の行を奬勵改善するに由なく其の外出をも監督すること至難ならん。彼の貧困と獨居とは監督者をして嚴重に彼に相當する端立なる品行を監視するを得ざらしむ。彼萬事に於て自ら己に務むるが故放肆の生活を爲さんと欲せば外出に多くの口實を有す。彼をして常に家に止まらしめんとする者は此等の口實を排除し其の要する所のものを供給し之に下婢を付して用を辯せしめ埋葬にも「パニヒダ」にも與からしめざる如くせざるべからず夫の狡猾なる蛇は善行を以ても己の毒を蒔くの方を知る。童貞女は四方より之を防衛して緊要已むを得ざる限りは一年の間稀に外出するが如くせざるべからず。此事を以て主教に委托するの必要なしと云ふ者あらば彼等各人に關するの懸念と原因が皆彼に關係を有するを知るべし。主教たる者は其職を辞して他人の事の爲に責任を恐るゝよりも自ら此等の事を監督して他人の過失の爲に必ず受くべき非難を免るゝこと頗る得策なりとす。且自ら之を行ふ者は大なる便宜を以て之を實行するも他人の意見を參考して之を行はざるを得ざる者に至りては自己の動作を免るゝに由りて安心を得ることあるも不滿にして彼の判斷に抵抗する人々より罵詈と不快とを買ふこと少からず。然れども我は悉く童貞女に關する懸念を枚擧する能はず。彼等を名簿に記入せんとするに當りてすら此職を負擔したる者に少からざる困難を感せしむ。

裁判事務(主教の職の)も多くの不快と煩慮と世間の裁判官と雖も思ひ到らざる困難の相伴ふものなり眞相を看破することは難くその看破したるものと雖も之を完全に保存すること亦難し。此事に關し

ては啻に煩慮困難あるのみならず少からざるの危險も伴ふものたり。弱信者の中裁判に服し辯護を得ずして信仰に背きたる者あり侮辱せられたる者の中侮辱者を憎み乍ら彼等に佑助を與へず事業の錯雜と事情の困難と神品の職權の有限なる事及び其他之に類する事を斟酌するを欲せず唯彼等を苦むる災難より救助する事のみを辯護せんとすと嚴乎たる裁判官たる者をも憎む者多し。之を行ふこと能はざる者は假令幾千たび辯護を試むるも決して彼等の非難を免かれざらん。余は今辯護のことに論及したるを以て此に他の非難の口實をも汝に告げん。主教にして若し日々市中取締人よりも多く人の家を訪問せずんば言ふべからざるの不平を起さん蓋し病者のみ彼の訪問を望むのみならず健全の者も亦敬虔の意嚮に依らんよりも寧ろ名譽及び尊敬を得んとして彼の訪問を希望する者多し。又若し教會の一般の幸福の爲め屢富裕の人有力の人と會見せざるを得ざる必要に際せば之が爲め忽ち人の歡を買ひ媚び諂ふとて譴責を招ぐ。然れども余が辯護訪問のことを言ふも何かあらん。主教は一回の談話の爲にも多くの非難を受けて其の苦きに堪へず憂悶の餘り倒るゝ者往々之れあり其の瞥見の爲にすら非難せらる其の區々たる行爲すら多くの者は嚴重に之を批判して音調容貌笑の程度にすら目を注ぐに至る。人動もすれば曰く彼は某に對しては莞爾として笑ひ快豁の容貌を以て高聲談話したるに我に對しては語ること少く冷淡なりと。彼若し多人數の集會に於て談話する時四方に目を注かずんば之を以て己の爲に侮辱と見做す。苟も大膽剛氣の者にあらずんば誰か能く斷々乎として行ひ或は斯く多くの非難者の誹毀を全く蒙らず或は之を蒙りて辯解するを得

んや。或は全く非難者を有せざること必要にして若し之を不可能なりとせんには其非難を辯駁すべく若し又此事も不都合なりとせんには―理由もなく徒らに人を誹毀するを以て樂みとする人々あるが故―毅然として此譴責の不快を忍ぶこと必要なり。故ありて非難せらるゝ者は其非難を忍ぶこと易し何となれば良心よりも嚴酷に非難する者なきを以て預め此の嚴酷なる非難者の譴責を受くるに於ては外部の非難は更に寛容なるものとして之を凌くこと易ければなり。然れども己に毫も非なることあるを感せざる者徒らに非難せらるゝ時は若し曾て世人の無禮を凌ぐことに慣れずんば忽ち激怒して憂悶に陷らん。無實に讒訴非難せらるゝ者が怒ることなく斯かる不正當の事よりして如何なる憂悲をも感せずと云ふことある能はず。(牧師が)何人かを教會の交親より絶つべき時に當りて感ずる所の憂悲を何とか言はん。嗚呼此災憂悲に止まらば猶可なり。此には少からざるの災難あり。度外に罰せられたる者が福たるパワェルが『恐らくは彼甚しき憂に沈まん』(コリンフ後二の七)と云ひたることに遭遇するの危險あり。故に此にても利益の爲に行ふ所の事を化して彼に大害を加ふるものと爲らざらしめんが爲め深く注意するを要す何となれば彼が斯かる治療の後に行ふ所の罪に對しては巧みに彼を治療せざりし醫師も彼と共に罰に服すべければなり。啻に己自身にて行ひたる罪の爲めに責任を負ふのみならず他人の罪の爲にも至大の危險に服せんとする者は如何なる罰を受くべきか。若し我等己の罪の爲めの責任を思ふて永火を避くるを得ずとして戰慄すとせんには斯く多くの人々の爲に責任を負ふべき者は果して如何なる苦境に遭遇すべきか。此事の當然な

るは福たるパワェル若くは寧ろ彼を經て言ふ所のパリストスの言を聞け、曰く『爾等の教導師に順ひて之に服せよ蓋し彼等は神の前に答を爲すべき者として爾等の靈魂の爲に儆醒す』と(エウレイ十三の十七)斯かる脅喝豈恐るゝに足らずと爲すか。是れ言ふ能はざる所なり。然れども此事のみにても夫の猜疑深く殘酷なる人々をして我が傲慢及び名譽心に依らず只管己の爲に恐れ(牧會)事業の至難なるを想像して遁避したる所以を知らしむるに足らん。

第四說

ワシリイは聞き了り稍〻躊躇したる後謂て曰く汝若し自ら此權を得んとして齷齪したらんには汝の恐怖も或は當然ならん。凡そ自ら進んで求むるを以て其事を行ふに堪ふると自認したる者は其任を受くるに及び無經驗を以て己の失錯を辨解するの口實とすべからず此くの如き人は自ら進んで此職を簒奪したるを以て預め自ら斯かる辨解の辭を失ひたるものにして自ら望んで其職に就きたるに依り我は知らず識らず彼此の失錯を爲し知らず識らず某々を滅したりと云ふ能はず。之が爲め彼を裁判せんとする者は彼に向ひて云はん『汝は此くの如き無經驗を自覺し此職を失錯なく行ふが爲め充分の知識を有せざるに何故自ら進んで汝の實力に超絕する任を負擔せんとしたるか。誰か汝に之を强ひたるぞ。汝が逃れ且避けんとしたるに誰か强ひて汝を誘引したるぞ』と。然れども汝は決して此くの如きことを聞くことなからん。汝自らも亦此くの如きことに己を責むること能はざらん汝が毫も自ら進んで此の名譽を求めず悉く他人にて行はれたることは衆人の知る所にして他人をして

失錯の爲め宥恕の辭を失はしむるもの汝をして辯解の好口實を得せしむ。

金口。此後余は頭を搖かし微笑しつゝ彼の質撲に感激し謂て曰く良友よ我亦自ら汝の言ふ所の如く事の成らんことを希望せしやも知るべからず但我が避けたる所の職を受けんが爲に非ず。假令我は輕忽無經驗にしてハリストスの群を慮りたるが爲め如何なる罰をも受くること無しとするも斯かる重大の任務我に託せられたる以上は我に之を託したる者に對して我の不當と爲りたることは我に取りて諸般の刑罰よりも重し。我が汝の意見の徒爾に歸せざらんことを希望せんとするは抑何故ぞ。豈此の憐むべき不幸の人々(汝は假令彼等が强迫的に任命せられ知らざるに依りて罪を犯したりと幾回辯解するも能く此任を盡さゝる者は斯く名つけざるべからず)をして消えざるの火、外の幽暗、死せざるの蟲、僞善者と共に寸斷せられ滅亡するを避くるを得せしめんが爲めなるか。我汝に對して何をか言はん。否是れ然らざるなり。汝若し欲せば王たることの神に對する責任は神品職に對する責任と同日の論に非ずと雖も余は此れより說き始めて我が言の確實なる證を汝に示さん。キスの子サウルの王となりしは自己の强求に依るに非ず彼は牝驢を尋ねんとて往き預言者を訪ふて之を問ひしに預言者は之に國に王たるべきことを語り而してサウル預言者より此事を聞くも自ら之を希望せずして『我は何人にして我が父の家は何たる』(撒母前九の二十、二十一)と云ひ以て之を辭したりき。而も其結果如何。彼は神より與へられたるの名譽を惡用するに當り彼果して此語を以て彼を立てゝ王と爲したる者(神)の怒を免かるゝを得たるか。彼は己

を責めたるサムイルに向ひて我豈自ら進んで王たらんとせしか。我豈汲々として此權を求めたるか。我は通常の人々の平穩なる生活を爲さんとせしに汝は我を此位に昇せたり我にして微賤の狀態にありしならんには蹉跌を免かるゝこと容易にして我若し凡庸卑賤の者たらば斯かる任を負はせられずして神亦我にアマリク人との戰を託せざりしならん而して此の委託なくんば我亦斯かる罪をも犯さゞりしならんと云ふを得たるならん。然れども此等の言たる辯解の爲に甚だ薄弱にして且啻に薄弱なるのみならず危險にして益神の怒を激するものたり。凡そ己の人格より高く尊敬せられざる者は此名譽の威嚴を以て己の失錯の辯解の辭と爲さず己を慮りたる神の高慮を化して益善に進むの動機と爲さゞるべからず高尚の位を得隨て罪を犯すことを自ら許容せられたりと見做す者は神の寛容を以て己の罪の原因と爲さんとするものに外ならずして即ち常に不敬虔にして品行を慎まざる人々に相當するものなり我等は此の如き思想を懷き彼等と同一の愚昧に陷らずして苟も我等自身に關することは萬事己の力に應じて實行し敬虔の舌と智慧とを有せんことを努めざるべからず。イリイも亦此權を得ることに汲々たらざりき(我輩此より轉じて本論の主旨とする神品職のことに移らん)。而も彼は罪を犯したる時之より何等の利益を得たるか抑我今彼汲々たらざりしと云ふは何ぞや。彼假令之を辭せんと欲するも法律の命に依りて避くること能はざりき何となれば彼は「レウィイ」支派より出でたるを以て血族に依りて繼承する此の權を受けざるを得ざりき。然るに彼亦其子の放肆の爲め少からざるの罰を受けたり(撒母前第四章)又彼のイウデヤ人の最初の祭司たりし

者即其の一人にて斯く多數の人民の愚昧に對抗する能はざりしが爲め神の屢モイセイに誡めたる所の者も若し其兄弟の代求神の怒を抑止すること微かりせば殆と滅亡に瀕したるに非ずや(出埃及記三十二章)。予は此にモイセイのことを引用したるを以て彼に遭遇したる所の事を以て亦我が言の眞理なるを證せん。福たるモイセイ自らイウデヤ人を統率するの意なく申込を謝絶し神の命令に聽從せずして命令したる者の怒を買へり(同上四の十三)。且獨り此時のみならず既に權を受くるに及んで之を脫せんが爲め寧ろ死せんことを希望したり彼曰く斯く我を爲んよりは寧ろ直に我を殺したまへと(民數記十一の十五)而して其結果如何。彼れ水を出すに當り罪を犯せし時(民數二十の十二)彼の絶えず峻拒したることは彼を辯護し神をして能く彼に赦免を垂れしむるを得たるか。彼が許約されたる地に入るを得ざりしは他の何等かの爲めなりしか。人々の知れる如く他の事の爲にあらで乃ち此罪の爲め斯かる偉人もその部下の者の達したる地に達するを得ずして幾多の辛苦艱難を嘗めて疲勞を極め未曾有の旅行を爲し戰ひて勝を得たる後その得んが爲に斯く辛勞を費したる地の外に死し航海の災に遭ひ良港の幸福を樂むを得ざりき。視よ獨り簒奪者(神品職の)のみならず他人の斡旋に依りて之を受くる者と雖も已の過失に關しては決して辯解するを得ざるを。若し夫の神自ら選拔したる時屢固辭したる者罰を蒙りアーロンにせよイリイにせよ福たる人、聖人、預言者、偉人にして温柔なること世の中の諸の人に勝り(民數十二の三)神と友の如くにして談話したる人(出埃及記三十三の十一)をすら此危難より救脫し得ざりしとせんには此の如き德を缺ける我等が自ら決して

此權を求めざりしとの自認は我等を辯護する充分の口實とならんこと疑はし況んや此選擧なるもの多くは神の恩寵に依らず人々の盡力に依りて成るに於てをや。神はイウダを選び之をハリストスの門弟たる聖徒の內に加へ他の諸使徒と共に之に使徒の位格を與へ他の者に優りて金錢を處理する特權をすら與へたり。而もその結果如何なりしぞ。イウダが彼此共に惡用しその宣傳すべき人を賣り付し慈善に使用すべきものを不善の用に供するに及び彼罰を免れしか。彼は此れにて己の罰を增したるのみ而して其事當然なり何となれば神に與へられたる特典は神を侮辱するが爲め使用せずして益彼の悅を得んが爲め使用すべきものなればなり。凡そ他人に優越するの名譽を得たるが爲めその受くべき罰を免るゝを得べしと思ふ者は不信のイウデヤ人中ハリストスの『我若し來りて彼等に言はざりしならば彼等罪なからん』と云ひ又は『我若し彼等の中に他の者の未だ爲さゞりし事を行はざりしならば彼等罪なからん』(イオアン十五の二十二、二十四)と云ふの言を聞きて救主及び恩人たる者を非難し汝何ぞ來りて言ひたるや何故に休徵を行ひしぞ是れ益我等の罰を重くせんが爲に非ずやと言ふに等し。是れ狂暴無智の言のみ。醫師の來りたるは汝を裁判せんが爲に非ずして醫さんが爲めなり汝病者を蔑視せんが爲めに非ずして全く汝を病より救はんが爲めなり然るに汝擅に彼の手を避けたり之が爲め汝の嚴罰を受くるは當然のみ。汝若し治療を受けたらんには痼疾より清まりたらんも汝は醫師の來りたるを見て之を避けたるを以て痼疾より清まる能はず若し清まる能はずんば之が爲め幷にその汝に對する焦慮を水泡に歸したるが爲め罰を受けん。故に吾人が神よ

り名譽を受けざる前と之を受けたる後被むる所の罰は決して同一なるものに非ずその後の場合に於ては遙に嚴重なり。慈善を蒙りて悛めざる者は罰を受くるや大なり。若し夫れ此の如く此辯解我等の證明したる如く薄弱にして之を利用する者を救はざるのみならず反て益重大なる危險に陷らしむとせんには我等他の辯護の方法を求めざるべからず。

ワシリイ曰く是れ何たる事ぞ。汝が此言を以て我を恐怖戰慄せしめしこと甚しく我今殆と惘然自失したり。

金口。我曰く否請ふ爾く恐怖する勿れ。猶辯護の途あり即ち我等住弱の者は決して(此の職に)就かず汝等堅固の者は神の恩寵を受くるに及んで救ひの望を此賜及び之を賜ひたる神に不相應なることを行はざることの外他に屬すべからざること是なり。自ら進んで此權を求め得たる者或は懶惰に依り或は不敬虔に依り或は無經驗に依りて其職を行ふこと不良ならんには重罰を蒙らん。然れども此の如き事の爲めには自ら進んで權を求め得ざりし者にも寛恕あるべからず彼等も亦決して推諉すべきなし。余の意見に依るに假令幾千人勸誘强請するも彼等に意を注かずして先づ自ら省み綿密に心中を探りて而して後勸誘者に讓歩すべきものとす。蓋し建築術を知らざる者家を建つるを約せず醫術を知らざる者病者の治療に着手せず假令多くの者之を强ゆるも固辭して己の無知を耻ぢずとせんには斯く多くの靈魂を慮ることを委ねらるべき者豈豫め自省せず自ら衆人中最も無試驗の者たるに拘はらず是れ某々の命なり某々の勸誘なり某々を怒らしめざる爲めなりとて其職に就くべけんや。彼れ豈に此の如き人々と共に己を現然たる災難に服するも

のに非ずや。彼己を救ふを得べかりしに己と共に他人をも亡すものなり。何處より救を期待し得んとするか。何處より寛恕を受けんとするか彼の時に及んで(未來の審判に於て)誰か我等を辯護すべきか。或は今日我等を勸誘强請する者ならんか。然れども其時彼等自身を救ふ者は誰ぞ。彼等は火を避けんが爲め自ら他人の助力を要す。我の今之を言ふは汝をして恐怖せしめんが爲に非ず事實の眞相を示さんが爲めなることは福たるパワェルがその門弟誠實愛する子ティモフェイに言ふ所を聞きて之を知れ曰く『遽に何人にも手を按する勿れ人の罪に與かる勿れ』(ティモフェイ前五の二十二)汝今我が我を此位に昇さんと欲したる者を曾に非難よりのみならず罰より免れしむるに如何に我が分を盡したるかを見るか。

第二、我自ら進んで之に就かず我之を洞見せざりしを以て辭せざりしと云ふこと被選者に取りて其辯解の口實と爲すに足らざる如く選擧者に取りても被選者の人と爲りを知らざりしと云ふの口實決してその罪を輕くするものに非ず反て其の知らざる者を採用した る所以のもの其罪を重くし辯解の口實と見ゆるもの偶以て其責を深うするものなり。若し奴隷を買はんとする者之を醫師に診斷せしめ其奴隷の爲に保證人を立てしめ近隣の人々に質問するも猶買取るに決せずして更に試驗の爲め長時日を要すとせんには人を此の如き職に任せんと欲する者他人の意に適し若くは適せずとて漫然保證評議し他に何等の試驗をも爲さゝるは豈輕忽に非ずや。我等を辨護すべき者自ら辯護を要する時に當りて誰か我等を辯護すべき者ぞ。されば選擧せんと欲する者も試驗を愼重にすべく被選者は猶更愼重にせざるべからず。選擧者は被選者の過失に對して

彼と共に罰に服するも選擧者にして苟も人情に基き正理公道に背きて行はざるに於ては彼亦此罰を免かれずして更に大なる罰に服するの恐あり。若し選擧者何等かの事情に依り知りつゝ不適任者を採用したる罪あるに於ては其者と同等の罰に服し無能者を選びたる者に至りては更に大なる罰に服せん。凡そ教會の爲め有害なる人に權を委ねたる者は其の大膽の擧動を罪せらるべし。若し彼毫も此の如き事に罪せられず世評に欺かれたりと云ふも罰を受けずして妄如たる能はず唯其罰被選者に比して稍輕きのみ。是れ何故ぞ。他なし選擧者は實際風評に誤られて此の如く行ふの恐ありと雖も被選者は他人の彼を知らざりし如く己自身を知らずと云ふ能はざればなり。故に彼にして之を採用したる者より罰せらるゝこと重しとせんには己を省みること彼等より一層嚴ならざるべからず而して彼等識らざるに由りて彼を勸誘したらんには自ら進んで欺かれたる人々を阻止する所以を確然說明し己の不當の者たることを明言して斯かる大事の重任を避けざるべからず。軍事に關し商事に關し農事に關し其他世俗の事に關して協議行はるゝ時には農夫は海を航せんとせざるべく兵士は地を耕さんとせざるべく舵手は軍人と爲らんとせざるべく假令萬死を以て威喝せらるゝも何人たりとも之が決心をせざるは何故ぞ。他なし彼等各己の無經驗なるに依りて危險を感ずればなり。若し彼の損害の重大ならざる事に關して我等注意周到にして行ひ强請する者の要求に抗すせんには此の神品職を推薦したるが爲め識らざる者永苦を受けんとするに於ては我等豈熟考深思する所なく徒らに口を他人の强要に托して己を斯かる危險に陷るべけれんや我等を審判せんとする

者は彼の時に至りて斯かる辯解を受けざるなり。身體に關する事よりも靈魂に關する事に對して注意愼重なるべきは當然なるに今我等はその愼重を同等にもせず。我等若し或人を以て建築術を知りたる者と思ひ實際其人の之を知らざるに拘らず之を招聘して其工事を托するに當り彼之を諾して建築の爲に備へられたる材料を取り木石を濫用して忽ち崩壞するが如き家屋を建てたりとせんに彼自ら好んで之を建てんとしたるにあらで他人之を强迫したりとの口實豈辯解に充分なりと爲すか。否而して其理や誠に當然なり他人の之を招聘したる時彼之を辭するは當然のみ。若し木石を濫費したる者決して罰を避くるに由なしとせんには靈魂を害し之が薫陶を忽にする者爭てか他人より强請せられたる一事之をして其罰を免れしむるものと爲すを得ん。是れ豈愚の極に非ずや。何人

たりとも人を其意に反して强迫するを得ずとは余の未だ論及せざる所なり。然れども假に何人か非常の强迫に遭ひ種々の奸計に罹りて意を狂ぐるに至れりとせんには此事果して彼をして罰を免れしむるを得べきか。否余は忠告す我等は斯くまで自ら己を欺き三才の童子だも猶且知る所のことを知らざる爲するが如きことを爲さゞらん況んや責任應答の場合に當りて斯かる虛僞的の不知は我等に益を來さざるに於てをや。汝は己の在弱なるを自覺するを以て自ら進んで此權を得んとせざりしか。善し正直なり。然らば他人が汝を招ぎたる時にも汝亦須く斯かる自覺の念を以て辭すべきは當然なり。或は何人も汝を招かざる時には在弱無能なりしも汝に此名譽を與へんとする者出づるに及んで汝俄に有力となりたりと云ふか。是れ嗤ふべく且虛僞にして嚴罰を受くべきものたり。

故に主も塔を建てんと欲する者に資金の足れるを計るに先だちて基を置き見る者をして哂ふの口實を得せしめざらんことを勸告せり(ルカ十四の二十八二十九)。然れども彼の災は嗤笑に止まるも此にては消えざるの火、死せざるの蟲、切齒、外の幽暗、寸斷、僞善者と共に滅亡すること其罰と爲らん(イサイヤ二十六の二十四馬太二十五の三十)。我を非難する者は毫も此等の事を知らんとせず然らずんば彼等徒に滅亡せんと欲せざる者を責むることを爲さゞらん。我輩の今論ずる所は小麥や大麥、牛や羊其他凡そ此等に類するものに關するに非ずしてハリストスの體其ものに關す。何となればハリストスの教會は福たるパワェルの言に依るにハリストスの體なるを以て(コロサイ一の十八)苟も之を託せられたる者は極めて整全美麗に之を守り萬遍なく注意して汚或は皺或は此の如きの汚點をしてその善と美とを害せざらしめんことを努めざるべからず(エフェス五の二十七)彼は宜く人間の能くする力を盡して此體を其の不朽幸福の首に相當するものと爲さんことを努むべきに非ずや。若し戰士の健全を慮る者にして醫師、教訓者、品行の方正、不斷の訓練及び其他多くの警戒を要すとせんには(何となれば聊にても不注意の點ありたらんには萬事を破壞顚覆すべきを以てなり)此の身體と鬪ふに非ずして無形の能力と鬪ふの身體を慮るの任を負擔したる者人間の德よりも遙に大なる德を有し靈魂の爲に有益なる諸般の治療方を知るに非ずんば焉んぞ無害健全に守るを得んや。

第三。汝或は此體(教會の)が我等の身體よりも更に多くの疾病と災厄に罹り之よりも害せらるゝこと速にして愈さるゝことの遲々たる

を知らざるか。身體の醫師は種々の療法と各種の醫具、病者に適する食物の種類を發明し空氣の一性質のみにて病者を愈すに足ること往々之れあり時としては一夜の快夢醫師をして全く勞を省かしむることすらあり。而も此にては一も此の如きものを發明する能はず實行の例に次きては言の敎訓てふ醫治の惟一の方法あるのみ。是れ器具是れ食物是れ空氣の順和なり。是れ藥劑の代り是れ火の代り是れ鐵の代りにして燒き盡すの要あるも又は截り斷つの要あるも言を用うること必要なり若し此言にして毫も効を奏せずんば他のものは悉く無益なり。我等は之を以て倒れたる者を興し錯亂せる心を鎭め無益のものを斷ち足らざる所を補ひ其他凡そ靈魂の健全に益する所のことを行ふ。他人の品行は相競ふの念を起さしめて最も能く品行を方正にするに益すべしと雖も靈魂が不正の敎理なる病にて惱む時は自家防衛の爲めのみならず他人と戰ふが爲めにも言は最も必要なり。若し奇跡を行ひ奇跡を以て無耻者の口を塞ぐを得る如き信仰の靈劍と楯とを有する者ならんには或は言の援助を要せざるべく否此の如き場合に於ても言は寧ろ其性質に由りて無益に非ざるべく反て極めて必要なることあらん。例へば福たるパウェルの如きも到る處休徵にて其名を轟したるに拘らず言を以て運動したり。使徒中の他の者も言の力を慮るべきを勸告し謂て曰く『凡そ爾等の望の緣由を問ふ者に答へんことを常に備へよ』と(ペトル前三の十五)。當時彼等がステファン及び其同勞者に對する施濟を慮ることを託したるは自ら支障なく傳敎を務むるの便宜を得んとせしに外ならず(行實六の四)。若し我等にして休徵を行ふの能力を有せんには言のことは多く慮るに及ばざるべ

きも此能力の痕跡すらも遺らず而も四方より敵の來襲止まざるに於ては我等敵の箭に傷つけられず更に能く彼等を擊退せんが爲め言にて防禦すること甚だ必要なり。

第四。故に『ハリストスの言の豐に我等の中に居らんこと』(コロサイ三の十六)を孜々として努めざるべからず。吾人は戰爭の一種類のみに準備すべきに非ず此戰爭は種々にして種々の敵の行ふものなり彼等は皆同一の武器を操縱し同一の策を以て我等を襲はんとするに非ず。故に諸敵と戰はんとする者は彼等の行動の方法を知り射手とも爲り投石者とも爲り聯隊司令官と爲り分隊指揮者と爲り兵士と爲り將軍と爲り步兵と爲り騎兵と爲り海上幷に城壁の下にて勇戰奮鬪する者と爲らざるべからず。夫の戰爭に於ては一方の任を受けたる者が來襲する敵を擊退すと雖も此にては然らず若し勝たんと欲する者此術の諸部に通曉せず一方面たりとも忽諸に付せらるゝに於ては惡魔は之を經て己の掠奪者を突貫せしめ羊を奪ふを能くす。然れども彼若し牧者が充分の知識を以て我を邀へその悉くの好策を看破するを見ば斯く(大膽の事を)爲さゞらん。されば各方面に於て能く防衛するを要す。城が四方より防衛せらるゝ以上は全く安全にして之を圍む者を笑ふを得べしと雖も若し一城門の大さなりとも其城壁を破る者あらば自餘の部分は假令依然として堅固なりとも城壁の圍墻より何等の益をも得る所なからん。神の城も亦猶此の如く城壁の代りに牧師の明敏深慮四方より之を防衛するに於ては敵の計略は皆化して彼等の耻辱嘲笑と爲り城中に住する者は害せらるゝことなしと雖も若し其一部分を破壞し去る者あらば假令全部を破らずとも此部分よりして他の悉くの部分に

波及するなり。彼若し異教人と善く戰ふもイウデヤ人之を劫掠することあらば何の益かある。或は彼と此れとに勝つことあるもマニヘイの徒之を掠奪することあらば如何。或は此等の者に勝ちたる後運命の教を傳播する者その中にあるの羊を殺すが如きことあらば如何。然れども惡魔の異端岐教何ぞ悉く之を枚擧すべけんや若し牧師たる者能く此等の異端岐教を悉く擊退し得ずんば狼は恐らくその一を以てなりとも多くの羊を呑噬ふに至らん。軍事上に於ては對立して相戰ふの軍よりは常に勝敗を期待すべきも此にては全く然らず。或者と戰ふに際し初め戰備を整へず毫も勞せず晏然として座するの敵をして勝を得せしめ此事に多大の經驗を有せる者が己の劒を以て自ら傷つけ味方幷に敵の爲に胡盧と爲ることは往々之れあり。例へば(予は實例を擧げて汝に我が言ふ所を説明せんとす)ワレンティン及びマルキオンの僞教を奉ずる者及び彼等と同一の病に罹れる者は聖書の中より神がモイセイに授けたるの律法を删除す而してイウデヤ人は今時期已に之を許さゝるに拘らず之を尊重し神の旨に反して全く之を遵守せんとす。然るに神の教會は兩者の極端を避け中庸を執りて律法の軛に屈從するを可とせず又之を誹毀するを許さずその止みたる後と雖も一時有益なりしが爲め之を稱贊す。故に彼此と鬪はんと欲する者は此の均衡を守らざるべからず。彼若しイウデヤ人に古法を格守するの其時期に非ざるを諭さんと欲して容赦なく之を誹毀したらんには異端者中の之を毀棄せんと欲する者に少からざる端緒を與へん若し又此の異端者の口を塞がんとして過度に律法を稱揚し現時猶必要なるものとして稱贊したらんにはイウデヤ人をして口を開くを得せしめ

ん。例へばサウェリイの狂妄及びアリイの邪説に迷はさるゝ者の如き二者共に過度に依りて健全の信仰より離れ二者共にハリスティアニンの名を冠すと雖も苟も彼等の教理を研究する時は彼等が毫もイウデヤ人に優る所あらずして單に名稱を異にするに過ぎざるを發見せん而して他の者の教に至りてはサモサトのパウェルの異端に酷だ似たる所あるも彼此共に眞理を去ること遠し。此に至大の危險あり兩側より斷巖絶崖にて圍まれたる狹隘の窄路あり甲を擊たんとして乙に傷つけざらんとせばその恐るゝ所少からず。例へば若し神性惟一なりと言ふ者あらばサウェリイは忽ち此言を取りて己の無智なる教の利と爲さん又若し甲を父と名づけ乙を子と稱し丙を聖神と名づけて區別を示す者あらばアリイは出でゝ個位の差を以て本體の區別に關するものと爲さん。然れどもサウェリイの不敬虔なる混淆説もアリイの無智なる分割説も共に須く之を斥けて父と子と聖神の惟一の神性を三位に於て認めざるべからず此の如くせば吾人は彼と此とに入口を壅塞するを得ん。此の外猶汝に擧示するに若し毅然として愼重に戰はざるに於ては自ら多くの傷を負ふに至るべき幾多の困難を以てするを得ん。

第五。己の隣の紛爭に就ては亦何とか云はん。此等の紛爭や教導者に取りて外面の攻擊よりも少からず更に多くの勞を要するものなり。或者は徒らに好奇心に驅られて知ることの無益にして且知ることの不可能なる事物を研究せんと欲し又他の者は神より其判の報告を得んとし此の大なる淵を測らんと欲す蓋し聖書に曰く『爾の判は大なる淵の如し』と(聖詠三十五の七)。信仰と品行のことを慮る者は少く尋ぬるも求むること能はず且之を尋ぬることが神を侮辱

する事となるものを研究捜索する者遥に多し。吾人は神が我等に啓示することを欲せざりし所のことを知らんと努めたらんには吾人到底之を知るを得ずして(蓋し神若し之を好まずんば如何にして之を知るを得べき)唯己の好奇心の爲め危險に遭遇せんのみ。然るに此の如き狀態に際して權力を以て端倪すべからざる事物を研究する者の口を塞ぐ者あらば其人傲慢無智の誹を招がん。故に此事に關しても司長たる者他の者をして取るに足らざるの質議を爲すを避けしめ而して亦自ら前に言ふが如き誹を避けんとせば深謀遠慮を以てせざるべからず。此等の事を行ふには獨り言の援助の外他に授かりたる所のものあるなし此の能力を得ざる者の狀態は始終夫の浪に搖蕩せらるゝ舟に劣らざらん予は薄信奇を好むの甚だしき人々に對して之を言ふ。故に司祭は此能力を得んが爲め全力を傾注せざるべからず。

ワシリイ曰くパワェルが此の能力を得んことを努めず己の言の拙きを耻とせず反て公然俚しと自認し而も能辯を以て誇り頗る之を稱賛したるコリンフ人に達する書に於て之を言ふは何故ぞ(コリンフ後十一の六)

第六。金口。我曰く此事の爲め滅亡を招ぎ眞誠の教理に對する熱心を冷かにしたる者多きが故なり。彼等は使徒の深き意味を確然了解しその言の眞意を悟ること能はざりしを以て拙き(俚き)を稱賛して曖昧模稜の中に日を送りたり而も其拙しと云ふものはパワェルが己の之れ有りと爲したるものに非ず彼の之れより遠きこと天の下に住する一人と雖も之に及ばざるなり。然れども此事は姑く他日に讓りて予は左の事を言はん假にパワェルは彼等が希望したる

意味に於て拙かりしとするも此事現今の人々に對して何の關する所あるか。彼は言よりも高尚にして遙に重大の事業を行ふに足るの能力を有したり彼一たび顯はるれは默然たるも惡鬼の恐るゝ所と爲れり而も今の人々は皆相集りて多くの祈禱を獻じ熱涙を垂るるも曾てパワェルの手巾の行ふを得たるが如き事(行實十九の十二)を行ふこと能はざらん。パワェルは祈禱を以て死者を復活し其他異敎人が彼を以て神と見做すに至りたるほどの奇跡を行ひ(行實十四の十一)且彼は此生命より移るに先だち第三重の天に擧げられて人の本性聞くこと能はざる言を聞くを得たり(コリンフ後十二の二至四) 然るに今の人々は(但予は毫も不快の苦言を呈せんとするの意あるに非ず今之を言ふは彼等を譴責するに非ずして乃ち諭さんが爲めなり)何ぞ斯かる人と己を比肩することを恐れざるや。我等若し奇跡を棄てゝ此の禍たる者の生行に目を轉じその天使的の行動を見たらんには其行動に於て休徵奇跡に於けるよりも多く此のパリストスの戰士の優勝の點あるを見ん。彼の熱心、溫柔、絶えざる危險、間斷なき焦慮、敎會の爲に常に苦心して止まざること、往弱者に對する同情、深大の憂悲、數回の窘逐、日々死に瀕するの危難(コリンフ後十二の二十四至二十八同上前書九の二十二)は誰か能く得て之を形容する者ぞ。宇宙孰の場所孰の地孰の海か此義人の功勞を知らざらん。彼の危難に遭遇せる時屢之を受けたる曠野も亦能く彼を知れり。彼は諸種の奸計を忍び有らゆる勝利を博したるも未だ曾て勤勞し榮冠を受けんとして止まざりき。然れども我は或は失言此偉人を侮辱するに至りたるかを知らず彼の偉功や言語の形容すべきなく我が言に超ゆること猶雄辯に長じたる者

我に卓絶するが如し。然れども之に拘らず(福たる者は實行の爲めに非ず志望の爲めに我を裁判せん)我は前に述べたる所の事に卓越すること猶彼の諸人に卓越するが如きことを言はざれば止まざるべし其事果して何ぞ。彼は斯かる功勞を積み無數の榮冠を受けたる後屢彼に石を投げ彼を殺さんとせるイウデヤ人の救を得てハリストスに歸せんが爲めには自ら地獄に下りて永苦に付せられんことを希望したり(ロ・マ九の三)。斯くハリストスを愛したる者之を愛と稱するを得べくんば他の愛より高尚なるものとするを得ざるか彼が上より斯かる恩寵を受け己の方より斯かる德を表したる後に及んで我等猶己を以て彼と比せんとするか。豈大膽之に過ぐるものあらんや。而も彼が彼の人々の許する如く拙なき者にあらざりしことは我今此に之を證せんとす。彼等の拙なき者と稱したるは世俗の雄辯術に長せざる者のみならず眞誠の敎を辯護する能はざる者を指したり而して其言ふ所や至當なり。然れども彼と此とに己を拙しと稱したるに非ず唯一事に對して拙しと稱し之を證せんが爲め確乎たる限界を立て、『我言には俚しと雖も知識には然からず』(コリンフ後十一の六)と云へり。我若し(敎會の牧師よりイソクラトの雄辯、ディモスフェンの氣力、フキディドの威嚴、プラトンの高風を要求したらんには此のパワェルの證を擧ぐること或は當然なるべしと雖も我は今姑く此等のこと及び外部の精緻なる裝飾を棄て、發言法をも演述法をも思はず。言に拙く其演說簡短未熟なるも敎理を知り及び正しく了解することに於て拙からずして己の怠惰を掩はんが爲め此の福たる人より彼の品格の至大なるものと其功の首たるものを奪はざるべきのみ

イソクラト及びディモスフェンは雄辯家、

第七。彼が未だ休徴を行はざるに先だち如何にしてダマスクに住するイウデヤ人をして周章狼狽せしめたるか請ふ我に告げよ。彼如何にしてエルリニストを説破したるか。何故タルスに送られたるか。彼が言にて烈しく彼等を説破し彼等をして敗辱を忍ぶに堪へず激怒の餘り彼を殺さんと決するに至らしめたるが爲に非ずや(行實九章)。此時パワェルは未だ奇跡を行ふに着手せず何人たりとも人民が彼の奇跡を行ひたる世評に由りて驚嘆し彼と戰ひたる者が此人に關する斯かる世評の故に由りて讓歩したりと云ふ能はず此れまで彼は唯己の言のみにて勝ちたり。彼はアンティオヒヤに於てイウデヤ風の生活を爲さんと欲せし者と如何に戰ひ如何に爭ひしか(ガラティヤ二章)。「アレオパグ」の一員安信に耽れる城の住人が妻と共に彼の信徒と爲りたるは彼の一傳敎に依るに非ずや(行實十七の三十四)。エウティフが牖より墜ちたるは何故ぞ。深更に至るまでパワェルの敎訓を聞くに耽りたるが爲に非ずや(行實二十の九)ソルンに於ては如何、コリンフに於ては如何。エフェス及び羅馬に於ては如何なりしぞ。終日終夜諄々として聖書の說明に從事したるに非ずや。その「エピクリ」及び「ストイク」の徒との爭論に就て何と言ふか(行實十七の十八)。若し吾人悉く枚擧せんとせば我が說非常に廣大と爲らんさればパワェルが休徴を行ふに先だち及び之を行ふ時に於ても屢言にて行動したりとせんには談話及び傳敎の爲め殊更人々に驚嘆せられし人を拙しと稱せんとするは何故ぞ。リカニヤ人が彼を以て「メリクリイ」と爲したるは何故ぞ。彼等(パワェル及びワルナワ)を以て神と爲したるは奇跡其原因を爲したれども

パワェルを以て「メルクリイ」と爲したるは其原因既に奇跡にあらずして言なりき(行實十四の十二)。此の福たる者(パワェル)が他の諸使徒に卓越したるは抑何に依るか。彼の名の全世界に於て最も諸人の口に嘖々たるは何故ぞ。彼が我等の間のみならずイウデヤ人及び異教人の間にまで最も多く稱賛せらるゝは何故ぞ。是れ彼が當に當時の信者にのみならず同時代より現時に至るまで住する者に利益を與へハリストスの再臨まで存在せんとする者に益を與へ人類の繼續する間此益を與へんとする公書の價値の爲に非ざるか彼の公書は恰も金城鉄壁の如く全世界に教會を防衛す。彼は今に至るまで最も勇武なる戰士の如く毅然として立ち凡その意思を檎にしてハリストスに從はしめ凡その謀と凡そ神の知識に逆ふ高慢とを破る(コリンフ後十の四、五)。彼は我等に遺したる驚異すべき神智に滿ちたるの書を以て此等のことを行ふなり。彼の公書は啻に僞教を排し眞誠の教を防衛するが爲め我等に取りて有益なるのみならず敬虔の生活に進捗するが爲め益する所少からず。教會の司長は今日に至るまで之を利用して彼がハリストスに聘定したる淨き處女(コリンフ後十一の二)を完全にして靈的の美に達せしむ。彼等は之を以て彼に遭遇する疾病を排除し彼に固有の健康を守る此の所謂拙き者は我等に此の如き醫治法を遺して其効力は實際に屢之を利用する者の能く知る所なり。是に依りて之を觀ればパワェルが此事に大なる熱心を表したること明かなり。

第八。猶彼が門弟に與ふるの書に言ふ所を聞け曰く『讀書と勸諭と教訓とを務めよ』と而して後此等の結果のことを謂て曰く『蓋し斯く行ひて爾は己及び爾に聽く者を救はん』と(ティモフェイ前書四の十三

十六)又曰く『主の僕は爭ふべからず乃ち柔和に衆人を待ひ善く敎訓を施し忍耐を爲すべし』と而して後曰く『爾は學びし所及び爾に託せられし所に居れ爾誰より學びしかを知ればなり且爾は幼より聖書を知る即ち能く爾に救を得せしむる智慧を與ふるものなり』と又曰く『聖書は皆神の感する所のものにして敎訓督責矯正及び義に導くに益あり神の人が全き者と爲らん爲めなり』と(ティモフェイ後書二の二十四同三の十四乃至十六)。又彼がティートに與ふるの書に主敎を立つることに就て言ふ所を聞け曰く『監督は學びし所の信なる言を堅く執り抗論する者を折く者たるべし』(ティート一の五、九)と彼等の言ふが如く拙からんには誰か能く抗論する者を折き其口を塞ぐを得んや。且若し此の如き拙きに安んせざるべからずとせんには何ぞ讀書を勵むの要あらんや。是れ皆揑造の說にして安逸惰

惰の口實及び掩蔽のみ人或は云はん然れども是れ司祭に命ぜらるるのみ何となれば今言ふ所司祭に關すればなりと。此事彼等の權下に在る者にも關するものたることは彼が更に他の書に於て他人に勸諭する所を聞きて之を知れ曰く『ハリストスの言は豐かに爾等の中に凡その智慧に居るべし』と。又曰く『爾等の言は恒に恩を以て且鹽を調和すべし爾等が如何にか他人に答ふべきを知らん爲なり』と(コロサイ三の十六、同四の六)。且『答へんことを備へよ』この言は衆人に對して言はれたり(ペトル前三の十五)又フェサロニカ人に達する書に(パワェル)謂て曰く『爾等互に德を建てよ爾等の已に行ふ所の如し』と(前書五の十一)。而も彼が司祭のことを言ふに當りては乃ち曰く『善く治むる長老は倍して之を敬ふべし言と敎とを以て勞する者には殊に然すべし』と(ティモフェイ前五の十七)。此の如く行

を以て言を以て其の教ふる所の者をハリストスの命じたる幸福の生命に導くは是れ最も完全なる教誨の方法なり蓋し唯一つの行のみにては教誨の爲に不足なり。是れ余の言に非ずしてハリストス其者の言なり彼曰く『之を行ひ且教へし者は大なる者と稱へられん』(マトフェイ五の十九)。若し行ふと云ふの言に教ふの意を含むとせんには次の言を加ふるは無益にして單に之を行ふ者はと云ふを以て足れりと爲さんも彼は今截然彼と此とを分つを以て建物の完全ならんが爲には此の二部分の各部が甲乙互に相要する所あるを示すなり。請ふハリストスに選ばれたる器がエフェスの長老等に言ふ所を聞け曰く『故に儆醒して我が三年間晝夜斷えず涙を以て爾等各人を誨へしを憶へ』と(行實二十の三十一)彼の使徒たる行は斯くも赫々として輝きたる時に於て涙若くは口頭の教誨に何の要かあらん。(彼の)行は我等をして誡を遵奉するに助くる所のもの多し然れども予は此點に關しても彼(行)一つのみにて萬事を完成したるものなりと言はず。

第九。若し定理に關する爭論起りて人皆同一の聖書に基づきて戰はんとするに際しては行は何の効力をか表するを得ん。何人か己の甚しき無經驗に依り此の如く辛勞したる後異端に陷り教會の體より離るゝが如きことあらば多くの辛勞亦何の益かある。此の如き事に遭遇したる者多きは余の知る所なり。忍耐彼に取りて何の益かあらん。毫も之れなきなり是れ品行亂るゝに於ては健全なる信仰もその益を爲さゞると同樣なり。故に他人を教誨するの任を託せられたる者は此の如き爭論に際して衆人よりも經驗に富まざるべからず。假令其人自ら敵より如何なる害をも蒙らずして安全な

りとするも其指導の下にある多くの平凡の人民が其將の敗られて毫も敵に對して反駁すること能はざるを見たらんには此敗因彼の弱きに在りと爲さずして其敎の確固たらざるに在りと爲さん即ち一人の無經驗に由りて滅亡の危險に罹る者勝て數ふべからず。若し彼等翻りて全く敵の方に轉せずとするも勢ひその信仰したる所に疑を容れその確乎たる信を以て近つきたる所のものに對し已に從來の如き確信を以て耳を傾くる能はず師の敗衂に由りて彼等の靈魂に暴風起り其災船の轉覆にて終らん。而して此の亡ぶる各人の爲め其の不幸なる首に如何なる滅亡如何なる猛火の集中せらるるや余は此事に就て汝に言ふの要なし是れ皆汝の皆能く知る所なり。されば余が斯く多くの人々の滅亡の原因と爲り今彼處に於て我の受けんとするよりも更に大なる罰を己に蒙らんことを望まざるは果して驕傲に出づると爲すか虛榮に出づると爲すか。誰か能く之を言ふを得べき者ぞ。恐らく他人の不幸に遭遇するを見て徒らに之を非難漫評せんと欲する者の外何人も之を言ふ能はざらん。

第五說

師たる者が眞理の爲に戰ふに當りて如何なる經驗を有すべきかに就ては余の說く所充分なり此外我は多くの危險の原因と爲る所のも猶適切に云へば其者自ら原因と爲らずして之を善く利用するを得ざる者その原因と爲る所のものに就て言はんと欲す熱心有爲の人物之を研究するに於ては此事自ら救贖と多くの幸福を得せしむるに至らん。其事果して何ぞ。大會に於て人民の前に立て演述する偉勞是なり。第一被牧者は多くは演述者を遇すること師に對す

るが如くするを欲せず門弟たるの位置より高く擧りて世間の觀物を觀覽する者の位置を執る。彼處に於て人民は相分れ或者は甲を贊し他の者は乙を賞する如く此處に於ても亦相分れて或者は甲を贊し又他の者は乙を賞して己の好意若くは惡意に應じて演述者の言を聽聞す。而して困難は獨り此一事にのみあるに非ず他の事に對する困難亦之に劣らず。若し演述者にして己の言に加ふるに他人の功勞の或部分を以てしたらんにはその譴責に遇ふこと他人の財産を掠奪したる者よりも甚しからん何人の功をも私せざるも唯その嫌疑を受くる者亦此の如き非難に遭ふこと往々之れあり。然れども我豈他人の功勞とのみ言はんや。彼は己の文章をすら利用するを得ざること往々之れあり。人々は多くは利益の爲にあらで娯樂の爲に聽聞するの習慣あり恰も演伎者若くは演奏者を品評する者の如し今我等が餘計のものと見做したる雄辯術も此にて賞贊せらるゝこと恰も「ソフィスト」輩が互に相爭ふに至る時之を賞するが如し。

第二。されば此にても人民をして此の鄙陋無益なる娯樂より心を轉せしめ更に有益なる事を聽聞するの氣風を起さしめ人民をして己に服從せしめ人民の慾望に左右せられざらん爲に遙に我等の往弱に超越する剛毅の精神を有する人物必要なり。而も此事たる譽を蔑視すると辯舌の力を以てする二方法を以てするに非ずんば其目的を遂ぐる能はざるなり。若し二者の中其一なくんば自餘の者も他と相分るゝに於て其益なからん。若し譽を蔑視する者恩と鹽とを調和したる(コロサイ四の六)教訓を授けずんば己の宏量より何等の益をも得ずして人民の尊敬を失はんも若し此事に關して正直な

る者拍手の譽に眩惑したらんには榮譽に戀々たるより聽衆の利益の爲めを謀らんよりも寧ろ快を買はんとして演述せんとする己自身の爲にも人民の爲にも同一の害を生ぜん。夫の譽を得んとする念なきも能く演述すること能はざる者が假令人民の歡心を買はずとも其の演述すること能はざるよりして之に著しき利益を與ぶること能はざる如く譽を得んとするに汲々たる者は人民の爲め教訓的の講談を爲すを得べしと雖も其の教訓的講談の代りに彼等の耳を喜ばしむる所の事を述べ以て拍手喝采を博さん。

第三。夫れ此の如く卓越せる指揮者は甲の缺點を以て乙を沒せざらんが爲め彼此れ共に有力ならざるべからず。彼人民の間に出でゝ安逸の生活を爲す者を譴責するも後心氣錯亂口訥りて辯論の乏きに依り赧然たるが如きことあらば忽ち先に演述したる所のものゝ益を失はん。譴責せられたる者は其の言ふ所を憤り他に之を復讐するの方法を有せずして其の無能の爲め之を嘲笑し之を以て己の缺點を蔽はんとすべし。故に彼は巧妙なる馭者の如く能く此の二個の德を有して彼と此れにて當然に動作するを要す。彼萬事に於て間然する所なきに於ては其の欲する所の權を以て彼の指導に委ねられたる所の人々を處罰するを得べく又釋放するを得べきも然らずんば斯かる權を得ること難からん。然れども宏量は唯譽を蔑視するのみに止まらず乃ち更に其上に及び利益をして復た不完全のものたらしむべからず。

第四。此外猶何事を戒めざるべからざるか。他なし嫌怨及び嫉妬是なり。無根の非難を非常に危ぶみ且恐るべからず(司長たる者が無稽の譴責に過ふは免れざるの數なり)又全く之を度外視すべからず

乃ち其非難假令虚僞なるにせよ假令取るに足らざるの人之を流布するにせよ速に之を取消さんことを慮らざるべからず。夫の無分別の人民ほど汚名及び名譽を増長するものあらじ彼は輕忽に聞き且言ふに慣れて凡そ其の見聞したる所のことを無分別に流布して毫もその眞なるや否やを慮らず。故に人民は決して之を蔑視せず惡しき嫌疑の起ることあらば直に之を撲滅し非難者をして其人假令最も無分別の者たりとも之を納得せしめ凡そ不名譽を滅絶するを得べきものは一も之を逸すべからず。若し我等が己の方より盡すべき所のことを盡したる後に於て非難者猶悟了するを欲せずんば之を蔑視して可なり。斯かる不快に遭遇するよりして志氣阻喪する者は決して偉大稱譽するに足るの事を行ふ能はず憂悲鬱々として已まざるに於ては靈魂の勢力を挫き疲困の極に至らしめん。

司祭はその被牧者に對することなるべし。彼等が或は侮辱し或は打ち或は泣く時我等之を厭忌せず又彼等が笑ひて我等に媚る時に於ても我等敢て之を意に介せざる如く司祭たる者も亦宜しく人民の稱譽するを聞て慢心せず又誹毀することあるも其事無根なるに於ては敢て憂とすべからず。福たる者よ是れ至難のことにして予は恐らく不可能の事ならんと思ふ。己を稱譽するの言を聞きて喜ばざる人人間中曾て之れありしか我の知らざる所なり既に之を喜ぶとせば之を受けんことを希望することは勿論にして之を受けんことを希望するに於ては此譽を失ふに際して憂悲煩悶懊々鬱々たるや必せり。夫の富者が富める時欣々然として貧困に陷るに及び憂愁し奢侈に慣れて貧困の生活を忍ぶ能はざるが如く譽に戀々たる者も亦啻に故なく之を誹毀する

時のみならず屢人に稱賛せられざる時と雖も彼等若し譽を受くるに慣るゝか若くは他人の稱譽せらるゝを耳にするに於てはその心にて苦むこと恰も飢に苦むものゝ如くならん。汝試に思へ此の如き慾を以て教誨の功勞を立つるに出でたる者の辛勞果して幾何ぞ憂悲幾何ぞ。海の決して浪立たざることは期すべからず、人間の靈魂も亦決して煩慮憂悲なからんことは之を期すべからざるなり

第五。言の大なる力を有する者(之を有する者多からず)すら不斷の勞苦を免るゝものに非ず。言の力は天賦のものに非ず研きて得らるものなるが故假令之を高尚の完全に達したる者たりとも若し常に勵精練磨以て己の力を開發するに非ざれば之を失ふの恐あり。故に教育の最も發達したる者はその發達少き者より勞することも最も多からざるべからず何となれば甲と乙との懈怠に伴ふ所の損失や同一ならず甲に取りて重大なること猶彼と此れとを有する者の間に差あるが如し。乙にして毫も卓越の雄辯を揮はずとも之を非難する者なかるべきも甲なる者若し常に衆人の想像する所に卓越するの講談を演せずんば衆人より有らゆる非難を蒙らん。且夫れ乙は些々たる事の爲にも大なる賞讃を博するを得べきも甲は其言にして大に人を驚嘆せしむるに非ずんば啻に賞賛を博せざるのみならず非難する者多く出でん。聽聞者は坐して說教を評するに其內容を以てせず說教者に對するの意嚮を以てす。故に苟も雄辯を以て衆に秀づる者は衆人より一層熱心に勵精するを要す此の如き人は萬事に進捗すること能はずとの人性の一般の缺點を以て推諉すべからず彼れの講談にして其人に關する高評に全く適合するに非ずんば人民より嘲笑非難を受くること夥しからん。偶其人に遭

遇したる憂悶不安煩慮時として憤怒の情に至るまで智の清亮を晦まし其智より出づる所のものをして光輝燦然たらしめず概して人間が常に一様にして萬般の事に必ずしも進捗する能はず時として自然罪を犯すこともあり己の實力より弱くなることありとのことには何人も想到する者あらず。我の言ひしが如く此の如き事は毫も之を思念するを欲せず乃ち説教者を目するに天使の如き者として之を非難す。要するに人間の性たる隣の功はその如何に多く且偉大なるも之に意を注かず而して若し缺點あらば如何に微々たるものたりとも又舊聞に屬するものたりとも直に之を發見し忽ち之に纏綿して常に之を記憶するものなり而して此の微々瑣々たるもの往々多くの偉人の榮譽を損するに至ることあり。

第六。視よ尊敬すべき者よ言の有力なる者が殊更大なる熱心を有し熱心と共に余の前に擧示したる人々の必ずしも悉く要せざる底の忍耐をも有することの必要なるを。多くの者は絶えず徒らに故なく彼を煩はし而して彼を罪するに由なきより彼が衆人の尊敬する所となれりとて之に敵對す。須らく毅然として彼等の厭ふべき媚嫉を忍はざるべからず。彼等は其の故なくして懷抱する此の厭ふべき媚嫉を掩蔽するを欲せずして誹謗罵倒陰に讒誣し陽に敵對す若し靈魂は斯かる不快に遭遇する毎に煩悶憤激したらんには憂悲に由り疲勞して毅然たること能はざらん。而して彼等は獨り自ら彼に仇するのみならず他人を以ても之を爲さんとす彼等は一も説教すること能はざる者を選び之を擧め上げて其技能より以上に之に驚嘆すること屢之れあり彼等の之を爲すや或は無智に依り或は愚昧と嫉妬とに依りて爲すものにして適任者の榮譽を損せんとす

るの意に出て不適任者を讃せんとするが爲に非ず。然れども有德なる人は啻に彼等と鬪ふのみならず沼々たる人民の愚と鬪ふに至ること屢之れあり。集りたる人民悉く學識ある者より成り立たんことは到底不可能の事にして集會者の大部分時として凡庸の人なることあり他の者は此の凡庸の人々に比して聰明なりと雖も雄辯のことを判知するの能ある人々に比すれば他の衆人の彼等に比するよりも遙に無識なり而して此の如き能ある者は漸く一人若くは二人あるのみなるを以て雄辯を揮ひし者拍手せらるゝこと少く時として全く稱賛を博せざることあるは免るべからざるの數なり此の如き不公平に對しては宜く毅然として敵對し愚昧に由りて此の如く行ふ者は之を赦し嫉妬に由りて行ふ者は不幸の者憫むべき者として之を哭し己の實力が彼に由りても此れに由りても減せらるることなきを確信すべし。夫の妙技衆に拔んでたる畵伯が此技を識らざる人々がその精を凝めて畵きたる繪を嘲笑するを見るも落膽し無識者の評に依りて其繪を拙畵と見做すべからざる如く實際拙き繪も唯無識者の之を賛する故に由りて驚くべき名畵と見做すべからざるに等し。

第七。巧妙なる美術家は亦自ら己の作の審査員たるべき者たり、彼等は之を作り出したる智の其作物に就て是非の評を下す時に於て良好若くは不良と見做すべく不正確無經驗なる他人の說の如きは決して之を念頭に懸くべからず。教師たるの任を負擔したる者も亦猶此の如く他人の稱賛に意を注かず之れなしとて落膽すべからず乃ち己の教訓を神に悅ばるゝ如く組み立てゝ(蓋し此事は彼が精密に教訓を組立つるの規範及び惟一の目的と爲るべきものにして

拍手稱賛はその目的とすへきものに非ず)若し人々に稱賛せらるゝとあらばその稱賛を斥けず又若し聽衆より之を博せざるも尋ねず憂悶せざるべし何となれば彼にして若し自ら心の中に己の教訓を神に悅ばるゝ如くに組み立てゝ此方針を執りたりと悟るを得たらんには是れ彼に取りて其勞に對する最良充分の慰藉なればなり。

第八。實に取るに足らざるの稱賛を博せんとするの野心勃々たる者は己の多くの勞よりも己の言の力よりも何等の利益を得ざらん何となれば人民の取るに足らざる非難を忍ぶこと能はざる者の靈魂は衰弱して言を練習するの嗜好を失ふに至ればなり。故に首として稱賛を度外視することを學ばざるべからず之れなくんば辯舌の一能のみにては己に此の力を保つが爲め不充分なればなり。此能を有すること不充分なる者に深く注意せんと欲する者は彼亦稱賛を度外視するの要あること彼に劣らざるを悟るに至らん。彼は人民より譽を得るに至らずして必ずや多くの罪に陷らん。即ち雄辯に秀でたる者と比肩するの力を有せずして之を敵視し嫉妬誹毀其他之に類する卑陋の念を抑制する能はず假令己の靈魂を亡ぼすとも己の能の乏しきを以て彼等の譽を博するを得たらんには萬事を決行せん。加之其精神亦稍衰弱を來すに依り此勞に對する熱心をも失はん。多く勞して譽を博すること少きに於ては實際譽を度外視すること能はざる者をして精神沮喪懊惱たらしむべし。例へば農夫の如きも不毛の田を開墾し磽土を耕すに於ては若し大に勞働を好むの傾きを有せず飢餓を恐れざるに非ずんば忽ち其勞を放棄せん。若し大なる權を以て言ふの能ある者にして此能を守らんが爲め常に練習するの要ありとせんには豫め毫も之が準備を爲さず

功勞の眞最中に於て此事を思念するの已むを得ざるに至りたる者に於ては大に苦心して假令些少の成功なりとも之を得んとするに於ては果して如何なる困難、如何なる心勞、如何なる慌惑に遭遇すべきものぞ。而して若し彼より後に立てられて卑き位置を占むる者此事に關して多く稱賛を博するに至りたらんには嫉妬憂悶に陷らざらん爲には恰も神の如き靈魂を要せん。高き位に立ちて卑き者に凌駕せられ毅然として之を忍ぶは余の如き凡庸の靈魂の能くする所に非ずして實に磐石の如き靈魂の能くする所なり。其の凌駕したる者温厚にして且極めて謙遜の人ならんには此の不快猶忍ぶべしとするも彼若し果敢傲慢にして好名心勃々たる者ならんには其人自ら死を望むに至らん彼陽に此人を凌ぎ陰に嘲笑し益其權を奪ひ萬事に於て之に代らんとし凡そ此等の事に於てその能辯と民間の人望と被牧者一同の倚賴心を重なる支障と爲すに於て彼は此人の生命を斯くも辛きものとするに至るなり。今「ハリスティアニン」の靈魂に雄辯を好むの念如何に發達し之を研究する者が獨り外部の人(異教人)のみならず同信の者(ガラティヤ六の十)にも深く尊敬せらるゝこと汝豈之を知らずや。その說教する時皆默し嫌厭の色を表しその言の終るを待つこと恰も勞働よりの休息を待つが如く而して他の者の說教は假令久しきに亘るも寬容を以て之を聽聞し其の中止せんとする時に憤り其の默せんと欲する時に怒らんとするに於ては誰か能く斯かる耻辱を忍ばんや。凡そ此等の事たる經驗を經ざるものなるを以て今汝は視て以て重大のものに非ず意を注ぐに足らざるものと爲すならんも苟も人間の諸慾を脫して嫉妬好名心及び其他之に類する弱點に染まざる無形體の能力に做

はんと努むる者に非ざる以上は熱心を消し精神力を弱むるの恐あり。若し此の捕捉し難く制すべからざる猛き獸即ち人民の譽を蹂躙し其の勝て數ふべからざるの頭を斬り棄て若くは寧ろ此譽に心を許さず未萌に撲滅し得るの人あらんには此等の攻擊を悉く排斥して恰も安全の港に於けるが如く安穩たるを得べきも斯かる超然たる念なき者は恰も種々の鬪爭を以てするが如く絕えざる驚慌憂鬱及び其他多くの慾を以て己の靈魂を煩はさん。未だ實地に經驗せざる者の言ふこと能はず知ること能はざる其他の困難も果して枚擧するの要あるか。

第六說

斯世に於ては今汝の聞けるが如くならんも我等に委ねられたる各人の爲に應答すべき時遭遇すべき所のものは我等如何にしてか之を忍ぶべき。彼處に於ては罰は耻辱に止まらず永遠の苦あるなり。『爾等の敎導師に順ひて之に服せよ蓋し彼等は神の前に答を爲すべき者として爾等の靈の爲に儆醒す』(ヱウレイ十三の十七)此事は余の曩にも言ひたる所なれども今又之を默々に付せず斯かる威喝の恐怖は常に我が靈をして戰慄せしむ。若し夫れ一人の而も極めて微微たる者を罪に誘ふ者は寧ろ磨石を其頸に懸けられて海の深處に沈めらるゝを優れりとし凡そ兄弟の良心に傷つくる者はハリストスに對して罪を獲る者なり(マトフェエイ十八の六。コリンフ前八の十二)とせんには一人二人若くは三人のみならず多くの者を亡ぼす者は果して如何なる苦を受け如何なる罰に服せんとするか。彼等は無經驗を以て推諉し無知無識に口實を籍り已むを得ざる事情

と強迫とを以て推諉すべからず若し此の如き辯解を爲すを許さるとせんには司長たる者が他人の罪を辯解するが爲めよりも寧ろ下部の者は己の罪を辯解するが爲め之を利用せん。何故ぞ。他なし他人の蒙を啓き惡魔との戰の起らんとするを警報すべき任を帶ぶる者は無知無識を以て推知し我は喇叭を聞かず我は戰を洞見せざりしと言ふ能はざればなり。彼の立てられたるはイエゼキイリの言ふが如く他人の爲に喇叭を吹き將に來らんとするの災難を預報するが爲なるを以て假令亡ぶる者一人に止まるも罰を蒙るを免れず。彼曰く守望者劍の臨むを見て喇叭を吹かず民警戒を受けざるあらんに劍臨みて其中の一人を失はゞ其人は己の罪に死ぬるなれど我其血を守望者の手に討問んと(イエゼキイリ三十三の六)。請ふ我を誘ふて斯く避くべからざる責任を負はしむるを止めよ。我等の言ふ所は軍隊に將たることに非ず王たること(此世の)に非ず乃ち天使の德を要する事件なり。

第二。司祭は靈魂を太陽の光線よりも清淨にし決して聖神に己を棄てらるゝことなく我生くるに非ず即ちハリストスは我の中に生くるなり(ガラテヤ二の二十)と言ふを得べきが如くせざるべからず。若し夫の曠野に住み市と市場と同所の喧擾より遠ざかり常に港に在る者の如く安穩を樂む者にして猶且己の生命を安全なりとせず他の多くの警戒をも執りて四方より己を防ぎ言行共に愼重を旨とし人間の能力の許す限り勇みと眞誠の清潔を以て神に近づくを得んことを慮るとせんには司祭が己の靈魂を諸の不淨より護り心靈の美を完全に守らんとせば汝果して如何なる能力剛氣を有せざるべからずと思惟するか。彼は之よりも遙に大なる清潔を要するも

のなり而して苟も大なる清潔を要する者は常に警醒し大に精力を盡して己の靈魂を不淨に染まざるものと爲すに非ずんば汚さるゝの場合更に多し。面の清秀と云ひ態度の風趣と云ひ擧動の整肅と云ひ音聲の嬌嫩と云ひ眼付の愛嬌と云ひ頰の嫣然たる狀と云ひ頭髮の縮方と云ひ其の香液の塗方と云ひ衣服の爛々、金品の爍々、寶石の燦々、香液の馥郁たるもの其他凡そ女性をして恍惚たらしむるもの若し嚴正なる貞節を以て堅く之を防衛するに非ずんば靈魂をして慌惑せしむるの恐あり。然れども此等のものに由りて慌惑を起すもの決して怪むに足らずして惡魔が之に相反するものを以て人の靈魂を衝きて之を傷つくるを得るものは大なる驚異疑惑の念を起さしむ。或者は此網を避けて他の之と其趣を大に異にするものに罹りたり。面を不潔にし髮を梳らず汚衣を纏ひ容貌見憎く應對粗暴言語曖昧態度整然たらず厭ふべき音聲を發し貧困の生活を營み卑賤の狀を呈し無援孤立なるものは觀る者をして初め憐愍の情を起さしむるも後極端の滅亡に陷らしむるものなり。

第三。金品、香液、美服及び其他余の擧示したる所のものより成る最初の網より避けながら忽ち他の之と全く相異なるの網に罹りて亡びたる者多し。若し夫れ貧も富も凛乎たる儀容も質素なる容貌も鄭重及び粗野なる應對及ひ凡そ余の枚擧したる所のもの皆觀者の靈魂に鬪爭を起さしめ四方より災難を以て之を圍繞せしむるの恐ありとせんには、彼如何にして斯く多くの網の中に在りて安穩なるを得べきか。其の强迫的に誘はるゝが爲にあらで(之より免るゝこと敢て難からず)乃ち己の靈魂を不淨不潔の思念にて擾亂せらるるより防かんが爲め何處に避所を求めんとするか。無數の弊害の

原因たる名譽の如きは余姑く措て之を言はず。婦人より與へらるる名譽は貞節の力にて弱めらるゝことありと雖も常に斯かる狡計に對して儆醒するに慣れざる者を倒すこと往々之れあり若し夫の男子より與へらるゝ名譽に至りては極めて冷靜の心を以て之を受けざるに於ては一には佞人に對して謙卑の態度を執るの已むを得ざると二には彼等より與へらるゝ名譽の爲め下の者に對して傲慢に出で愚昧の淵に陷りて二つの相反する慾即ち奴隷的の追從と恩かなる高慢に陷るに至らん。此事は余の已に言ひし所なるが之より如何なる害の生ずるかは自己の經驗なきに於ては何人も知る能はざる所なり。苟も人々の間に交際する者は曾に此等の危害のみならず他の更に大なる災難に遭遇するを免れず。唯曠野を愛せし者は凡そ此等の危害より免るる若し時として罪惡の念慮彼をして之に類するが如きことを想像せしむることあるもその想像弱く視力を燃すの材料を他より供給することなきを以て忽ち消えん。修道士は唯獨り己の爲に慮るのみ若し他人の爲に慮るの已むを得ざることありとするも極めて少數者の爲めのみ假令多く是れありとするも其數常に教會に屬する者より少く且彼等の爲に慮ることは曾に其の少數なるが爲めのみならず彼等が皆世俗の業務より超脫して妻子及び他の之に類するが如きことを慮るの要なきを以て院主に取りて遙に易し。此事たる彼等をして能く院主に聽從せしめ彼等をして共同の生活を爲し罪過は緻密に之を認めて矯正するを得せしむ斯かる教導者の絶えざる監督は德に進捗するの益を爲すこと尠からず。

之に反して司祭所轄の大部分は俗務に齷齪として彼等をして

國神の事に意を傾け難からしむ。故に教師は毎日教訓の言を蒔き少くとも其の教訓の絶えざることにて聽者に服膺せしめざるべからず。豪富權勢華奢より出づるの懈怠及び其の他蒔かれたる種を撲滅するもの多く此の荊棘の茂きより種子をして地の外面にすら落るに至らざらしむること往々之れあり。又一面には非常の憂悲貧困の窮迫絶えざる懊惱其の他前述の事情に相反するの原因も亦是れ神聖の事物を研究一るを妨ぐるものたり罪に至りては其の最少部分たりとも司祭の知らざる所なり彼大部分の人々の面をすら知らざるに於て爭でか之を知るを得ん。彼の人民に對する職務に伴ふ所の不便や此の如し而も若し彼の神に對する義務を檢したらん者は此義務の微々たるを知らん神に對する義務の至大慎重の熱心を要すること此の如し。全市の爲に―我何ぞ全市と云はん―全世界の爲に祈り獨り生ける人々の爲めのみならず死せる人々の爲めにも神の怒を息めんとする者は自ら如何なる者たるべきか。モイセイ及びイリヤの果敢すらも余は此くの如き祈禱の爲めには不足と見做す。彼が神に近づくこと恰も全世界が彼に託せられ彼自ら衆人の父たる者の如くにして到る處に戰爭の止むこと、叛亂の鎮靜すること、安和幸福なること、各人の身の上に罹れる公私の災難より速に免れんことを祈願す。故に彼は恰も司長が其の保護の下に在る者に卓越するが如く萬事に於て其の祈る所の者に卓越せざるべからず。彼が聖神を籲び畏るべき献祭を行ひ屢萬人に共同の主宰に觸るゝ時は我等は彼を誰と同列にすべきか請ふ我に告げよ。彼より如何なる清潔、如何なる敬虔を要するか。此奉事を行ふの手は果して如何なるべきか、斯かる聖神の恩寵を受くるの

靈魂は如何に清く且神聖ならざるべからざるか請ふ須く之を三思せよ。此時は天使等も司祭の前に立ち在天の能力の全群は顧び謳ひて祭壇の周圍の場所は之に坐し給ふ者の名譽の爲め彼等にて充たさる。其時行はるゝ所の事は充分之を保證して、餘あり。余は曾て某より左の如き談を聞きたることあり屢異象を見たることある或る偉大なる司祭は某に向ひて曾て奉事を行ふ時光輝燦然たる服を衣たる無數の天使が祭壇を圍繞して恰も主の前に侍立する兵士の如く頭を俯したる異象を見たることを語りたりと。而して余は之れありたるを確信す。又他の或る人は他人より聞きたるにあらで自ら此世を去らんとする者が清き良心を以て機密を領するに於ては最後の呼吸を引取る時天使が之を圍みてその領聖したる故に依り之を伴ひたることを見聞したりとて余に告げたることあり而も汝は我が靈魂を斯かる神聖の機密に導きハリストスが他の談話者の仲間より逐ひたるが如き汚き衣を衣たる者(マトフェイ二十二の十三)を神品の位に昇せんとして戰慄せざるか。司祭の靈魂の輝くこと全世界を照らす光の如くならざるべからざるに不淨の良心より出づる暗黑深く我が靈魂を掩蔽して我が靈魂常に暗中に沈み敢て己の主宰を仰ぎ視るの勇氣なし。司祭は地の鹽(マトフェイ五の十三)なるに我の無識と萬事に於ける無試驗とは非常に我を愛するに慣れたる汝の外誰か能く之を容忍する者ぞ。司祭は至大の職に任せられたる者なるを以て啻に清淨潔白たるのみならず智慮甚だ深く多くの事に經驗ありて世事に通ずること世俗の交際家に劣らず俗塵を去ること山間に住する修道者の上に出てざるべからず司祭は妻を有する者、子女を敎育する者、婢僕を使役する者、巨

萬の富を有する者、公共の事業を經營する者、權力を有する者と交はるの必要あるを以て多方面の人たらざるべからず、余は多方面の人たるべしと云ふ然れども狡猾の人たるべからず追從者たるべからず僞善者たるべからず乃ち大なる自由、敢爲の氣象を懷抱すると共に若し事情要するに於ては利益を以て讓歩するを得るの人と爲り溫厚たると共に嚴肅の人たらざるべからず。醫師が同一の方法を以て悉くの病者を醫すべからず舵手が唯風と鬪ふの方法のみを知るべからざるが如く悉くの部下のものを遇すること一樣なるべからず。暴風常に敎會の船を震撼す而して此暴風獨り外より吹き込むのみならず內部よりも起ることあるを以て司祭たる者は大なる注意と愼重とを要す。

第五。此等の種々の行爲は皆唯神の光榮敎會の堅立てふ一の目的に歸す。修道者の功や大に其勞や偉なり。然れども彼等の勞を以て能く其職を行ふの司祭と比する者あらば彼等の間に差あること猶平民と國王との間に於けるが如きを見ん。彼等の勞も大なりと雖もその苦行には靈魂身体共に與かるものにして若くは更に正しく云へばその大部分は身体を以て行はるゝものなり而して其身体若し强健ならずんば熱心は實地に表顯するに由なく唯熱心として殘るのみ。嚴齋と云ひ地に横臥する事と云ひ警醒不眠と云ひ身体を洗はざる事と云ひ難役と云ひ其他身体を疲勞するの方便と爲るものは疲勞さすべき身体にして强健ならざるに於ては皆之を廢して可なり。而も此にては純乎たる靈魂の動作を要するのみにして其德を彰はさんとせば身体の健康に必要あるなし。傲慢ならず激怒せず横暴ならず節制廉潔溫良の人と爲り其他凡そ福たるパワェル

が良司祭を形容するに當りて枚擧する所の性質(ティモフェイ前三の二)を有することに就て身体の健康果して我等に助くる所あるか然れども修道士の德に就ては斯く言ふべからず。興行師には輪繩劒等多くの道具必要なるも哲學者の動作はその靈魂にのみ係りて毫も外部のものを要せざるが如く此にても亦然るなり。修道者は身體の安全幷に人々と甚しく遠ざからずして曠野の靜寂を保ち併せて空氣の順和を失はざらんが爲め便宜の住所を要す何となれば齋を以て己を疲らす者の爲めには不順和なる空氣など害をなすものあらざればなり。

第六。彼等が自ら己の爲に衣食を備ふるに當り如何に之を慮らざるべからざるかは余此に之を言はざるべし。司祭に至りては己の使用の爲め毫も之を慮るの要なく己の爲に慮らず萬事共同的に(被牧者と)生活し己の靈魂の寶庫に有らゆる知識を積みて害を來すことなし。若し己の裡に隱遁して人民との交際より遠ざかることを贊する者あらば余自身も或は之を忍耐の徵と稱すべしと雖も此事を以て未だ靈魂の充分なる勇剛の證と爲すべからず。港に在りて舵を操る者は未だ以て其術に熟する證と爲すべからず唯海の中に在り暴風を冒して能く船を救ふを得たる者あらば何人たりとも之を好き舵手と稱せざる者あらざらん。

第七。されば我等は修道者が自ら隱遁して心を攪亂せず多く重き罪を犯さゞればとて非常に驚異すべからず彼は凡そ其靈魂を刺激攪亂すべきものより遠ざかりたるなり。然れども若し全人民に役事するの務に己を献げ多くの者の罪を擔ふの義務を帶べる者亂れたる時に於て恰も靜謐の時に於ける如く能く靈魂を御して不動毅然

たらば彼が衆人の拍手驚異を博すること理の當然なり何となれば彼己の勇氣の明證を表したればなり。故に汝も亦我が世間と人々との交際を避けて己に對し多くの非難者を有せずとて驚異する勿れ又我が夢中に罪を行はず搭闘せずして倒れず戰はずして負傷せずとて驚異すべからず。我が罪過を指摘暴露すべき者は誰ぞ請ふ我に告げよ。此の屋根か將た此の草蘆か。然れども彼等は言ふこと能はず最も能く余の性質を知れる母なるか。然れども我には就中彼と毫も共同的のものなく我等の間に未だ曾て爭論の起りたるとなし若し此事ありたりとするも相當の理由もなくして衆人の前に其の懷妊產出養育したる者を誹毀侮辱するが如き殘忍無慈悲の母なからん。若し緻密に我が靈魂を檢せんと欲する人あらば汝衆人よりも最も多く人々の前に我を稱贊するに慣れたる者の知る如く我が靈魂に多くの弱點あるを發見せん。余が謙遜に依りて之を言ふに非ざる所以は談、此事に及ふ毎に若し我に向つて敎會の司長職に於て好名を博せんと欲するか將た修道の生活に於てせんと欲するか其一を選べと云ふ者あらば余は無論甲を選ぶべしとのことを汝に語りたること幾度なるかを記憶せよ。我は未だ曾て汝の前に善く此務めを行ひ得たる者を贊することを止めたることなし故に我若しその自ら贊したる所の職を行ふに堪ふるに於ては之を避けざるべしとのことは何人も爭はざる所ならん。然れども我果して何を爲すべきか。或人々の稱して奇異の苦行とする此の安逸無爲など敎會の司長職に取りて不利益に非ざるものなし而も我は之を以て恰も自己の無能の幕の如きものにして之を以て我が無數の缺點を蔽ひ之をして外に顯はれしめざるものと爲す此の如き無